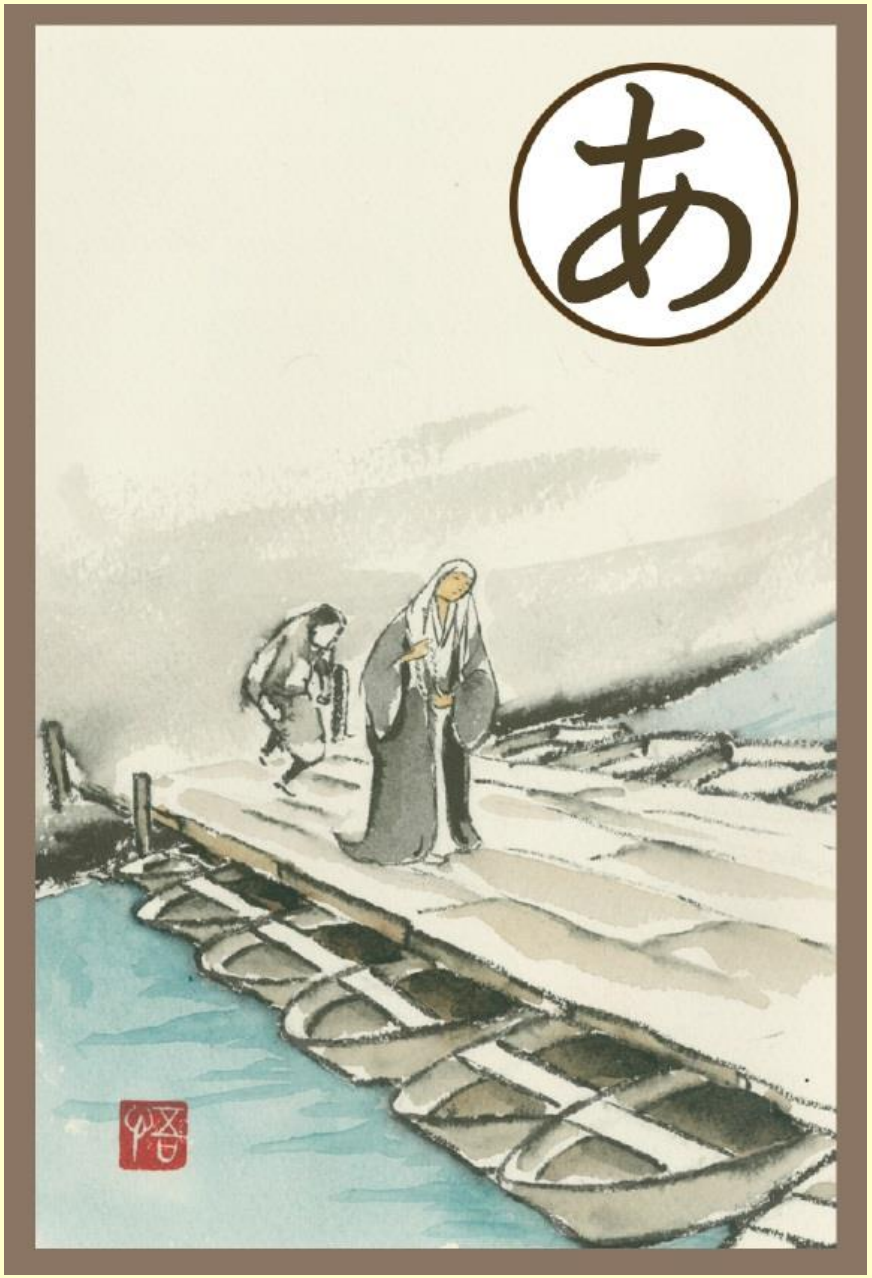
墨俣地域は、古くから美濃路や鎌倉街道の要衝として繁栄してきた宿場町で、史跡が点在し、豊かな景観を形成しています。墨俣地域の景観・歴史・文化を表現するカルタの「読み札」を募集したところ、564作品の応募があり、その中の44作品を基に絵札を制作しました。別ファイルを印刷していただき、カルタ遊び等にご活用ください。

なお、カルタ制作に当たっては、墨俣地域まちづくり協議会の協力のもとで行い、平成29年度大垣市景観形成市民団体事業補助金で制作しました。

絵札　久野　悟

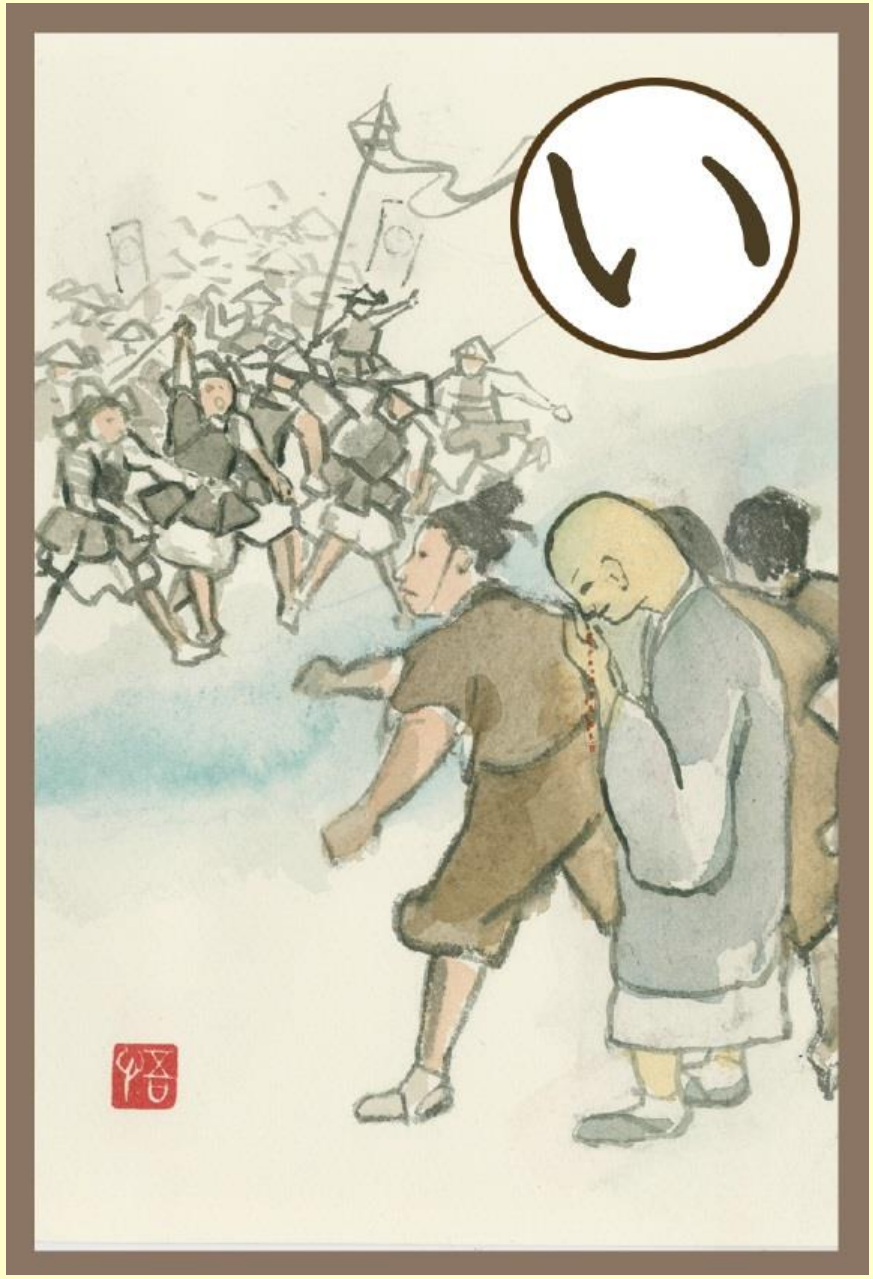
1951年神戸町生まれ。
岐阜県小中学校教員として奉職。
9．12災害時に東安中学校に勤務。
大垣市立南中学校長を最後に退職。垂井町在住。

現在、岐阜女子大学非常勤講師。
大垣中日文化センター講師。
岐阜県水彩画会事務局長。
大垣美術家協会副理事長。
六酔会副会長。岐阜Ｇひがし代表。



阿仏尼(あぶつに)も　心(こころ)もとなし　船(ふね)の橋(はし)

十六夜日記(1280年頃)を書いた阿仏尼は建治3年(1277)10月19日に墨俣を通りました。鎌倉街道を通行し、墨俣川(長良川)を渡る際、綱で船を繋ぎ並べて架けてある船橋を渡った記述があります。一夜城址公園に「かりの世の　ゆききとみるも　はかなしや　身をうき舟の　浮橋にして」、又、満福寺には「かたふちの　深き心は　ありながら　人目づみに　さぞせかるらん」の歌碑があります。



命(いのち)かけ　教如(きょうにょ)守(まも)った　土手組(どろてぐみ)

教如上人は東本願寺の開祖です。関ケ原の戦いの直前、教如は関東の家康への陣中見舞いを終え、その帰路墨俣川の渡船場付近で石田三成の西軍の襲撃を受けました。教如は、森部村（安八町）、墨俣村など15か村20か寺の信徒に助けられ、森部村の光顕寺にかくまわれました。その門徒らは、土の付いた手で農具を持ち教如を救ったことから、後に「土手組（どろてぐみ）」と呼ばれ、本山直参のお墨付きを賜りました。

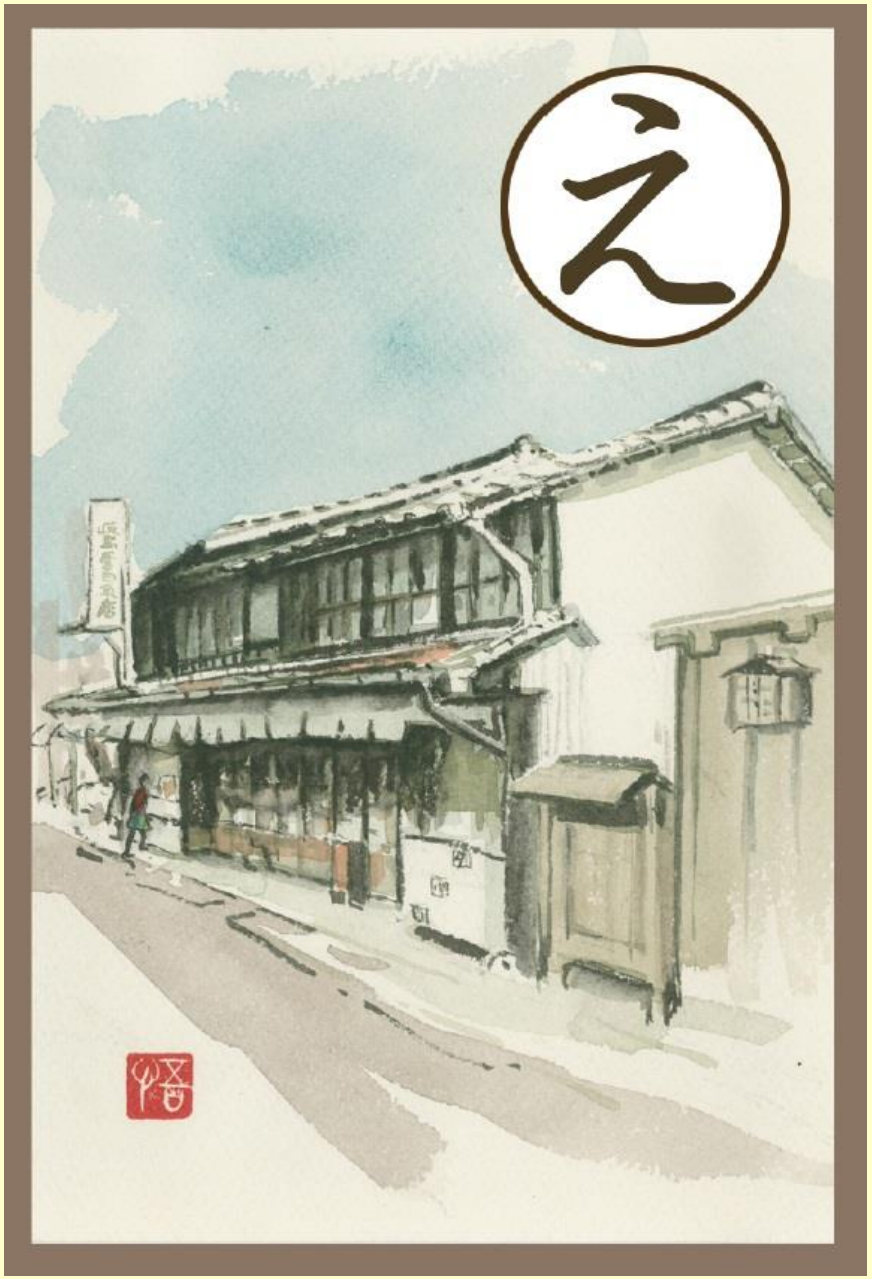
20か寺では、この戦で命を落とした19人に対し、400年以上を経た現在も「十日講」という形で供養が続けられています。

薄紅の　衣を纏う　一夜城
（うすべに　ころも　まと　いちやじょう）

一夜城址公園の周りを流れる犀川の堤防には3kmに渡る桜並木が続き、多くの花見客でにぎわいます。

「城郭天守」形式の墨俣一夜城歴史資料館は、花の盛りの時期には、桜花で囲まれた様を見ることができます。

☆大垣市景観遺産



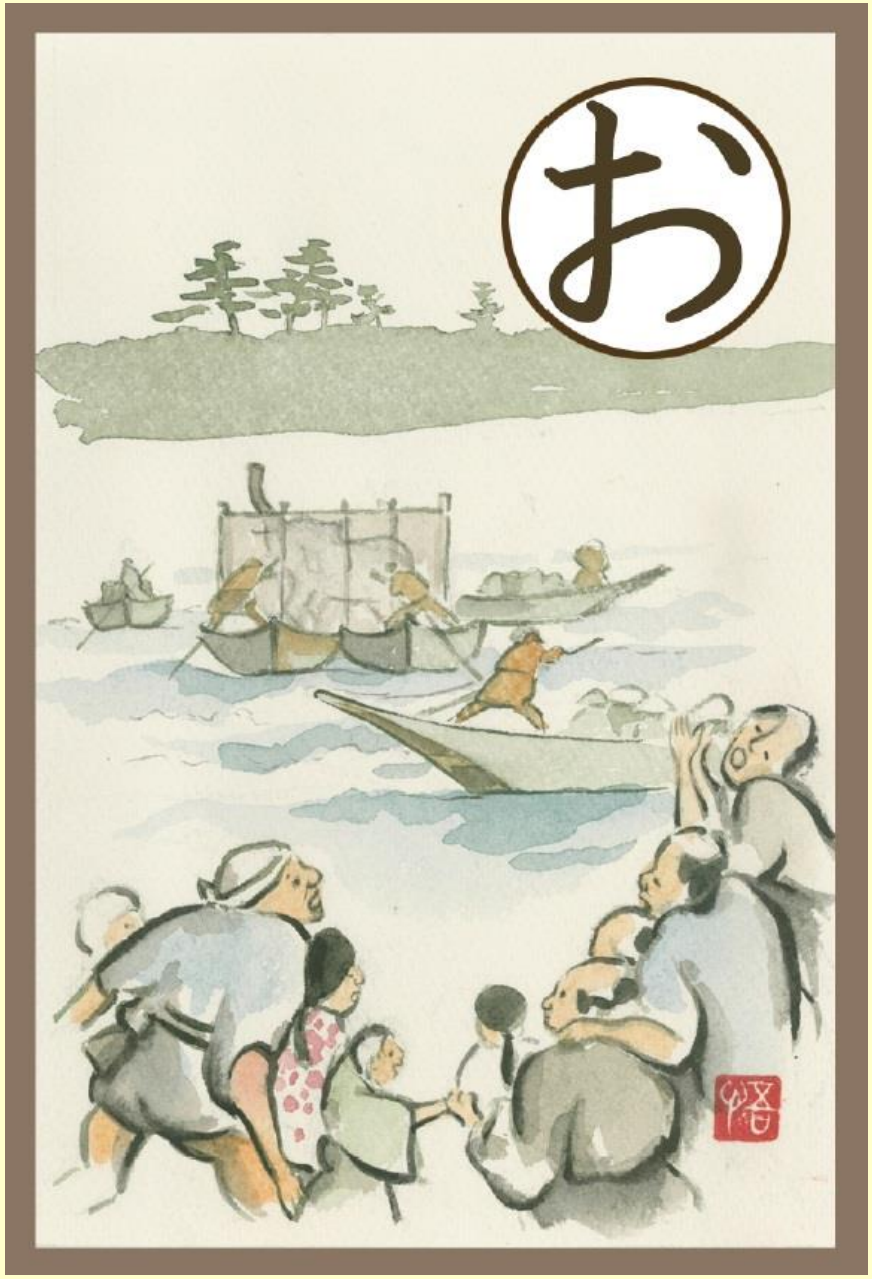
得がたい　往年の建築

岐島屋百貨店

昭和5年以前から現在地において営業している商店で、建物の西半部が二階の軒高の低い「つし二階建て」、建物の東半部が軒高の高い「本二階建て」の二棟の建物からなっています。

本二階部分では袖壁を設け、今では珍しい模様が入ったすりガラスや表面が波打つ古いガラスが用いられるなど、近代の時代性を表す意匠が特徴的です。旧脇本陣の並びにあり、近世以来の商家の趣を伝えて墨俣の街並み景観に重要な存在です。

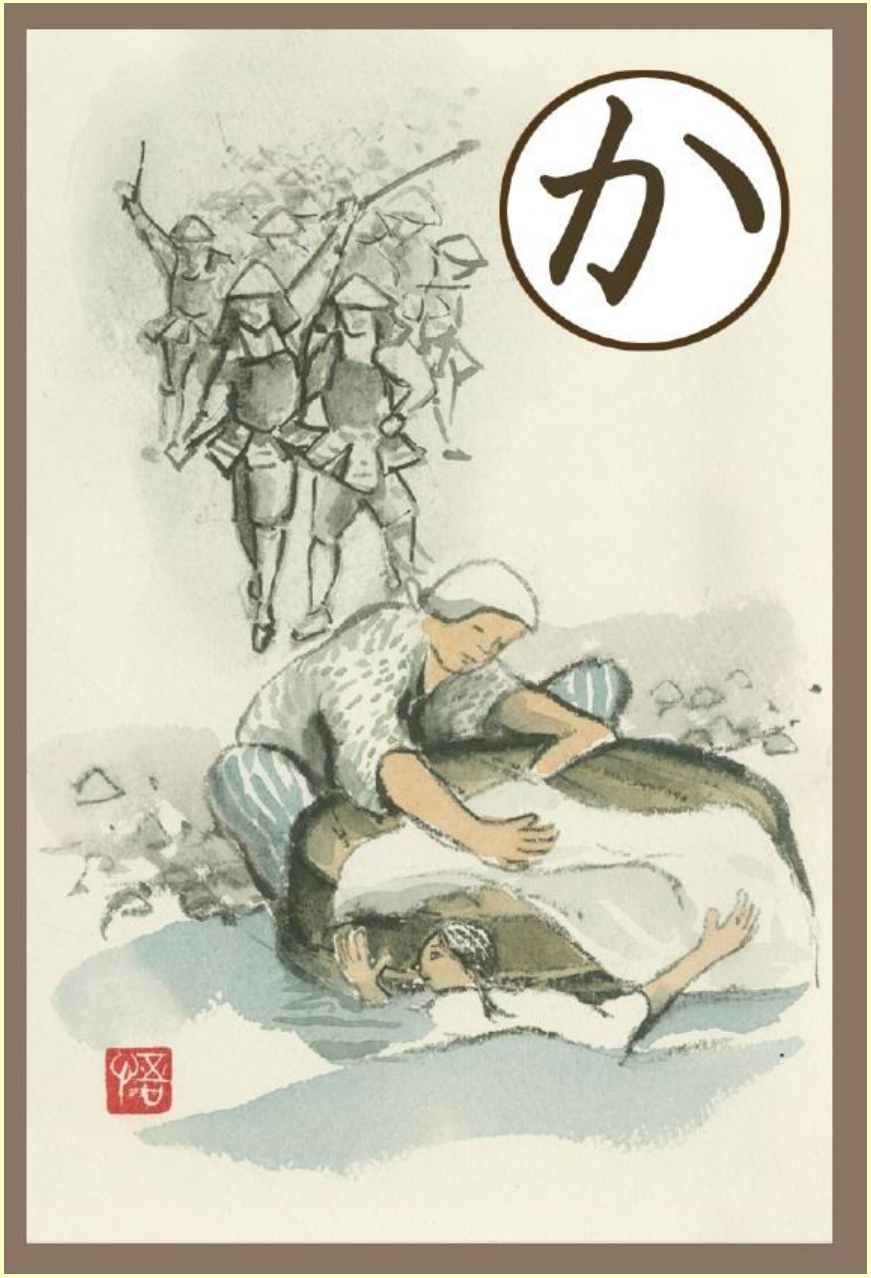
☆大垣市景観遺産



大騒ぎ　墨俣川を　渡る象

（おおさわ　すのまたがわ　わた　ぞう）

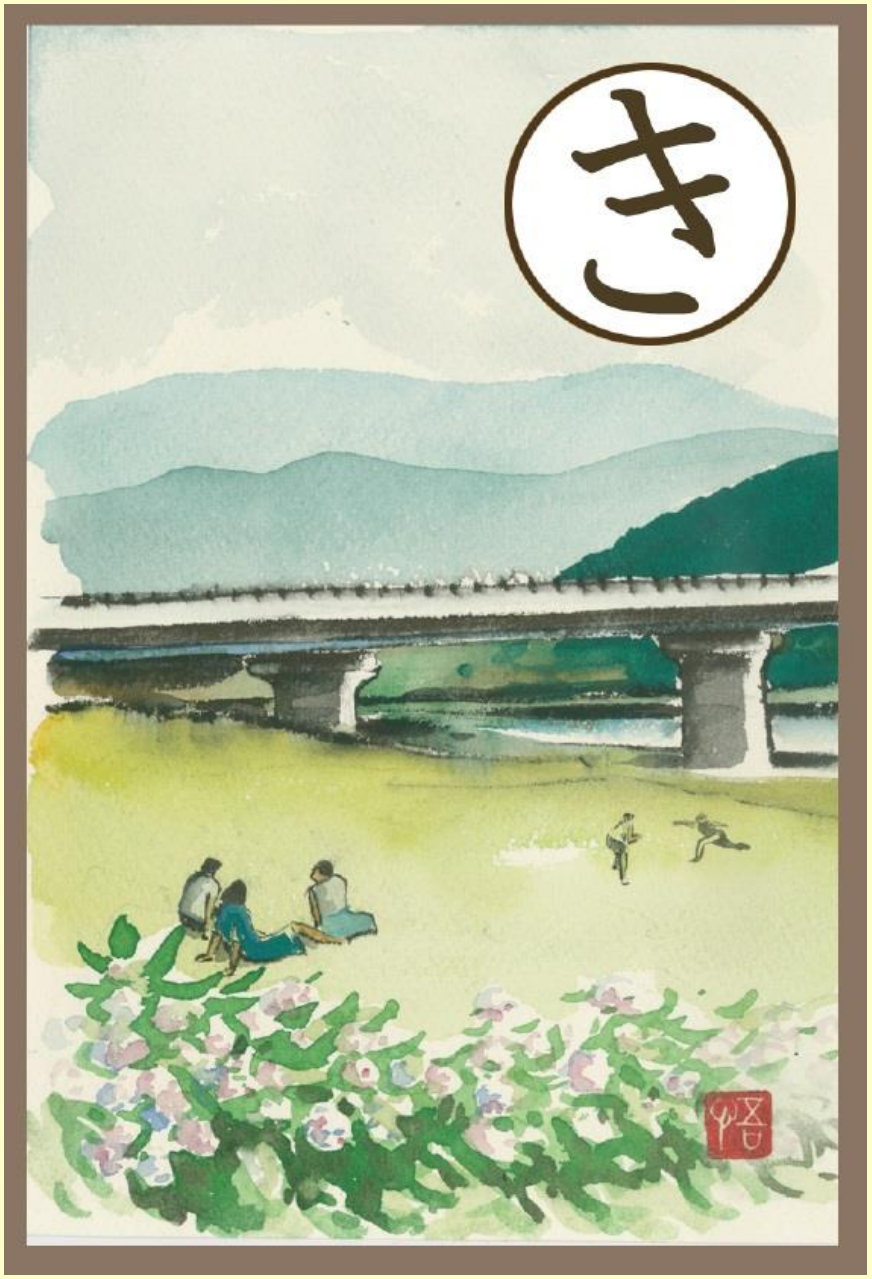
享保13年（1728）6月、交址国（ベトナム）から長崎に象が到着し、将軍家に献上するため江戸に向かいました。享保14年（1729）5月に、美濃路墨俣宿を通過しましたが、墨俣川（長良川）は水深が深いため、船を二艘つないで、象には水が見えないようにむしろで囲い渡しましたが、象を一目見ようと集まっていた多くの人の歓声に驚き、見物人に向かい突進しました。全力疾走した象は村外れで落ち着き、その後無事に江戸までたどり着き、八代将軍吉宗が見物しました。



川渡る（かわわた） 大海人皇子（おおあまのおうじ）

助けた（たす） 女（おんな） 不破明神（ふわみょうじん）

「宇治拾遺物語」の中に記されている伝説で、壬申の乱（672）の前に、出家して吉野にこもっていた大海人皇子を、大友皇子が殺そうとしました。その計画を大友皇子の妃（大海人皇子の娘）が、鮒の包み焼きの腹に文を入れて知らせました。大海人皇子は、墨俣で川を渡ろうとしましたが舟がなく洗濯をしていた女に尋ねました。まもなく、大友皇子の兵が来たので、女がたらいをひっくり返してその中に大海人皇子を隠し、難を逃れました。この女は上宿の不破明神であったといわれています。

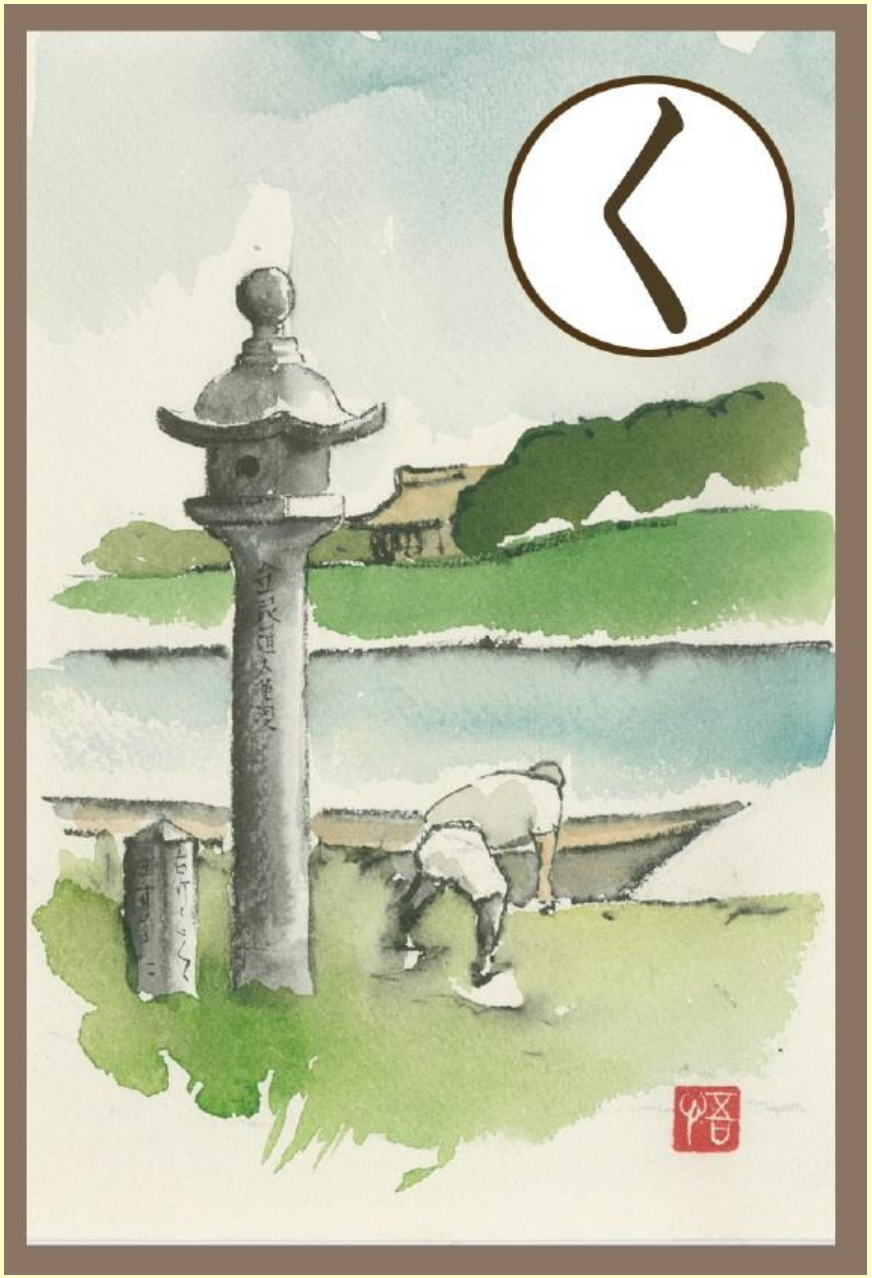


季節折々（きせつおりおり）

自然豊かな（しぜんゆたか） さい川（かわ）さくら公園（こうえん）

大垣市と瑞穂市により、犀川の下流にある河川敷（犀川遊水地）に市民の憩いの場として、また、子どもたちの環境学習の場として広場や小川、あじさい公園などがある「さい川さくら公園」が平成21年に整備されました。

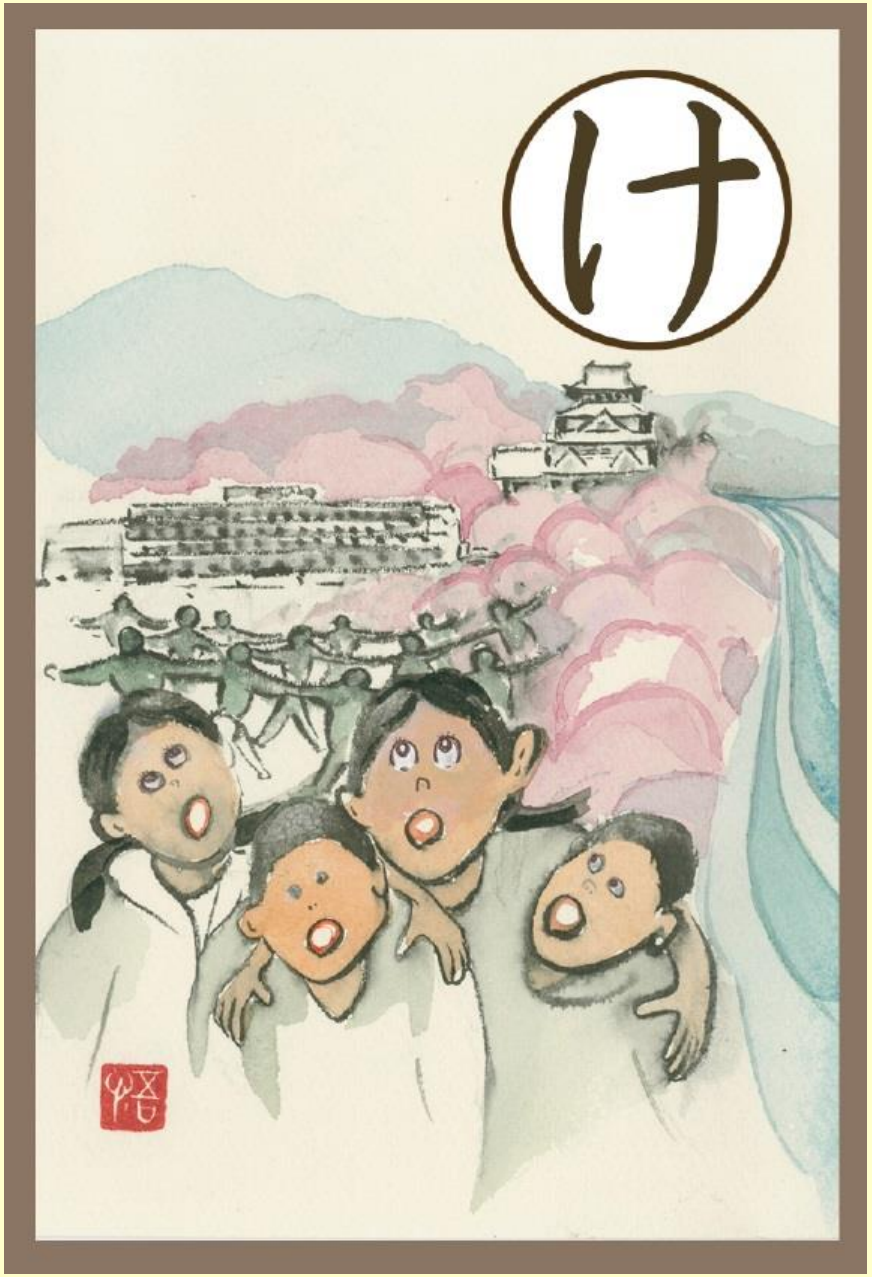
320台分の駐車場があるため、週末や催事時は、多くの利用者で賑わいます。



繰り舟の　名残のひとつ　常夜燈

デレーケの三川改修工事前の中須川は、墨俣と安八の境を東西に流れ長良川・揖斐川に通じていました。渡船は、森部一色辺りにありましたが、その舟は、旅人自らが張り渡された綱を手で繰って行き来するものであったので、繰舟川とも言われました。

この常夜燈は、中須川渡船場近くの墨俣輪中堤に立っていたといわれています。火袋は破損しコンクリート製に替わっていますが、道しるべとともに下宿地内に現存しています。



元気な幸の子

歌う校歌は　双魚作

　昭和38年（1963）の墨俣小学校創立90周年記念事業のひとつとして、新しい校歌が制定されました。

　作詞は、本校卒業生であり、大学教授で俳人の長谷川双魚（1897年～1987年）氏に依頼し、現在も児童たちに親しまれています。もちろん「幸の子」は墨俣小の児童のことです。

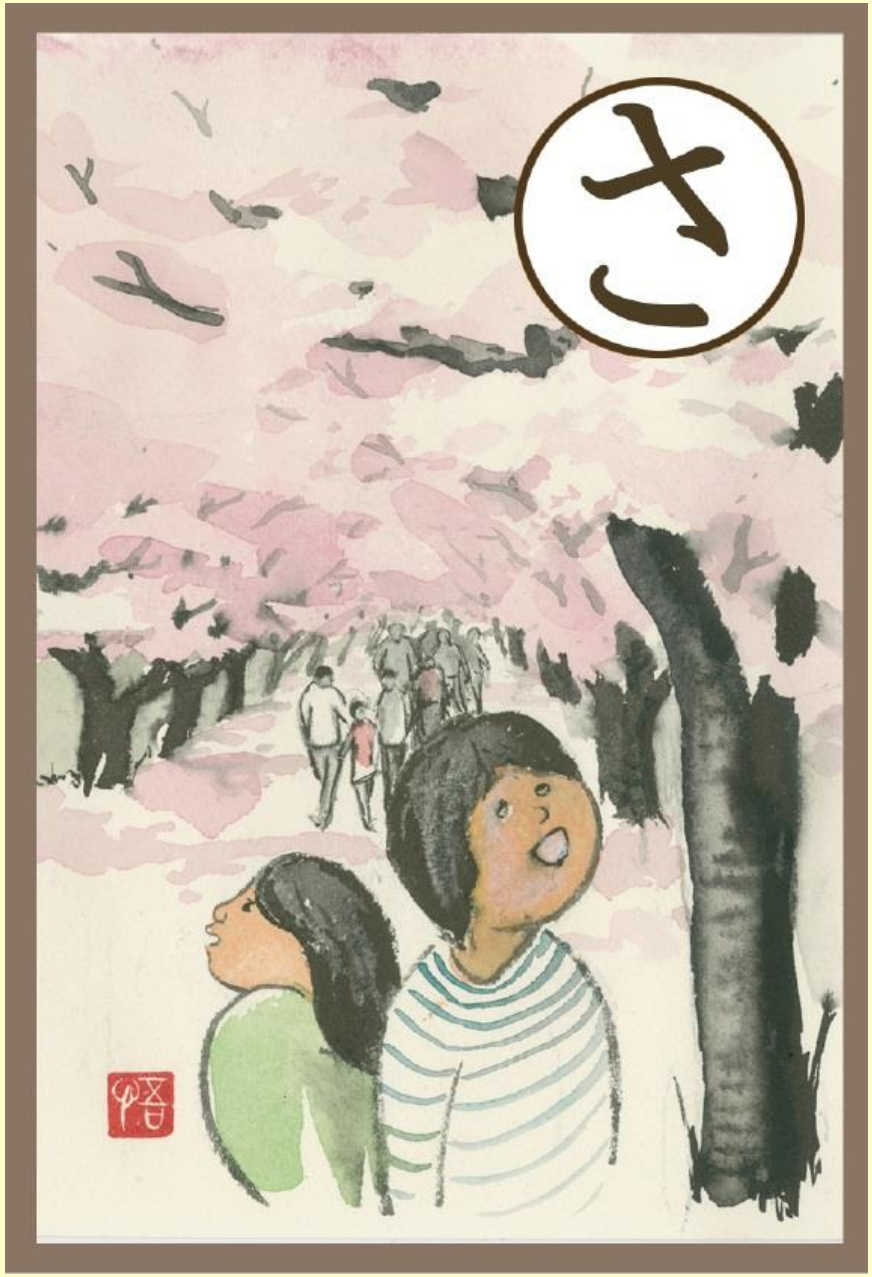
　なお、日本画家の長谷川朝風は、双魚の弟です。

今宵(こよい)も　美濃路(みのじて)を照らす　常夜燈(じょうやとう)

墨俣の渡しには、文化12年(1815)頃に造られた大きな常夜燈がありました。

明治24年(1891)の濃尾震災により損壊し、台座のみとなり、昭和8年(1933)に犀川改修工事のため、墨俣神社と共に現在の位置に移転されました。

美濃路を往来する人々を安全に導いてきた常夜燈の往時の姿を偲び、大垣東ライオンズクラブにより平成24年に中町本陣跡に新たに建てられました。

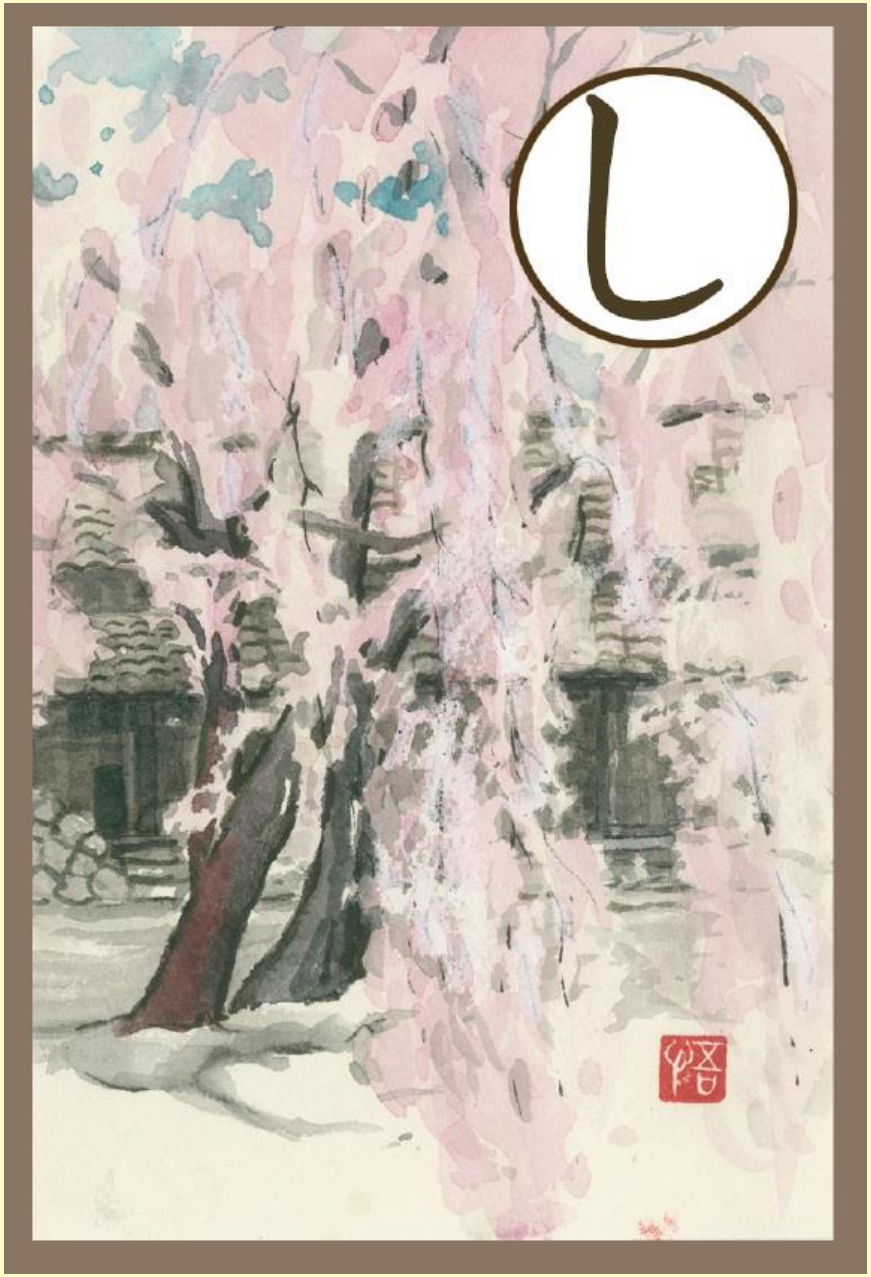


桜(さくら)はね　自慢(じまん)のひとつ　宝物(たからもの)

戦前までは、堤町の堤防に桜並木がありましたが、昭和20年代に、料芸組合が犀川堤の美観と組合の発展を願って植樹し、現在では約 700 本の桜並木が3キロにわたり続いています。

3月下旬から4月中旬の桜まつりには、屋台も出され、夜桜も楽しめます。

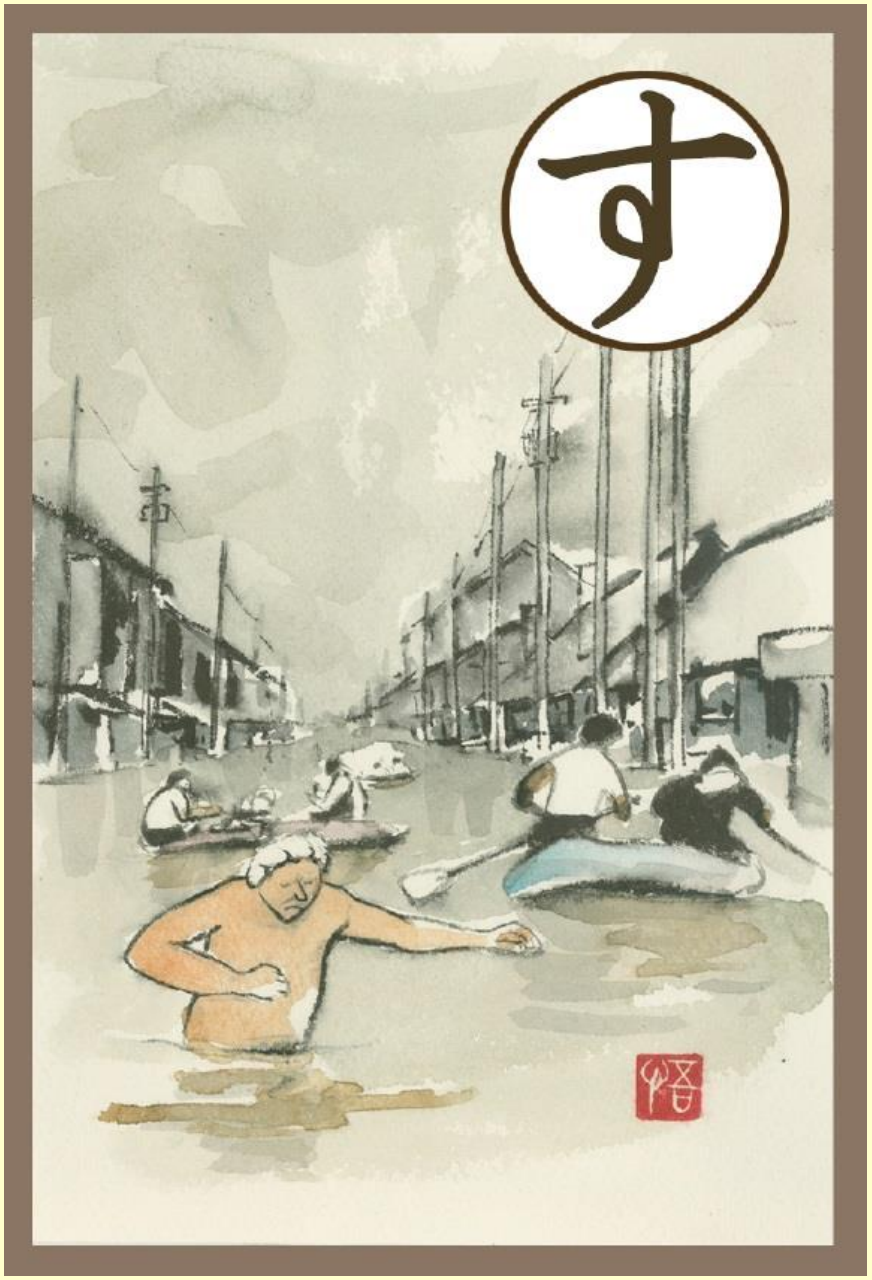
墨俣の桜は小学4年生の道徳の副読本に、郷土愛がテーマの「徳べえざくら」の物語として昭和63年度から平成29年度まで取り上げられました。



下野家（しものけ）の　枝垂れ桜（しだざくら）と　水屋蔵（みずやくら）

　鎌倉街道沿いの下野家には、室町幕府第12代将軍足利義晴から拝領したといわれる樹齢約500年もの枝垂れ桜があります。樹高約8m、枝張り15m以上あり、丸いドーム型をしています。また、この桜の西側には水屋風の古い蔵があります。枝垂れ桜と古い蔵は、門や竹林とともに、とても落ち着いた素晴らしい風景を醸し出しています。

　☆大垣市景観遺産

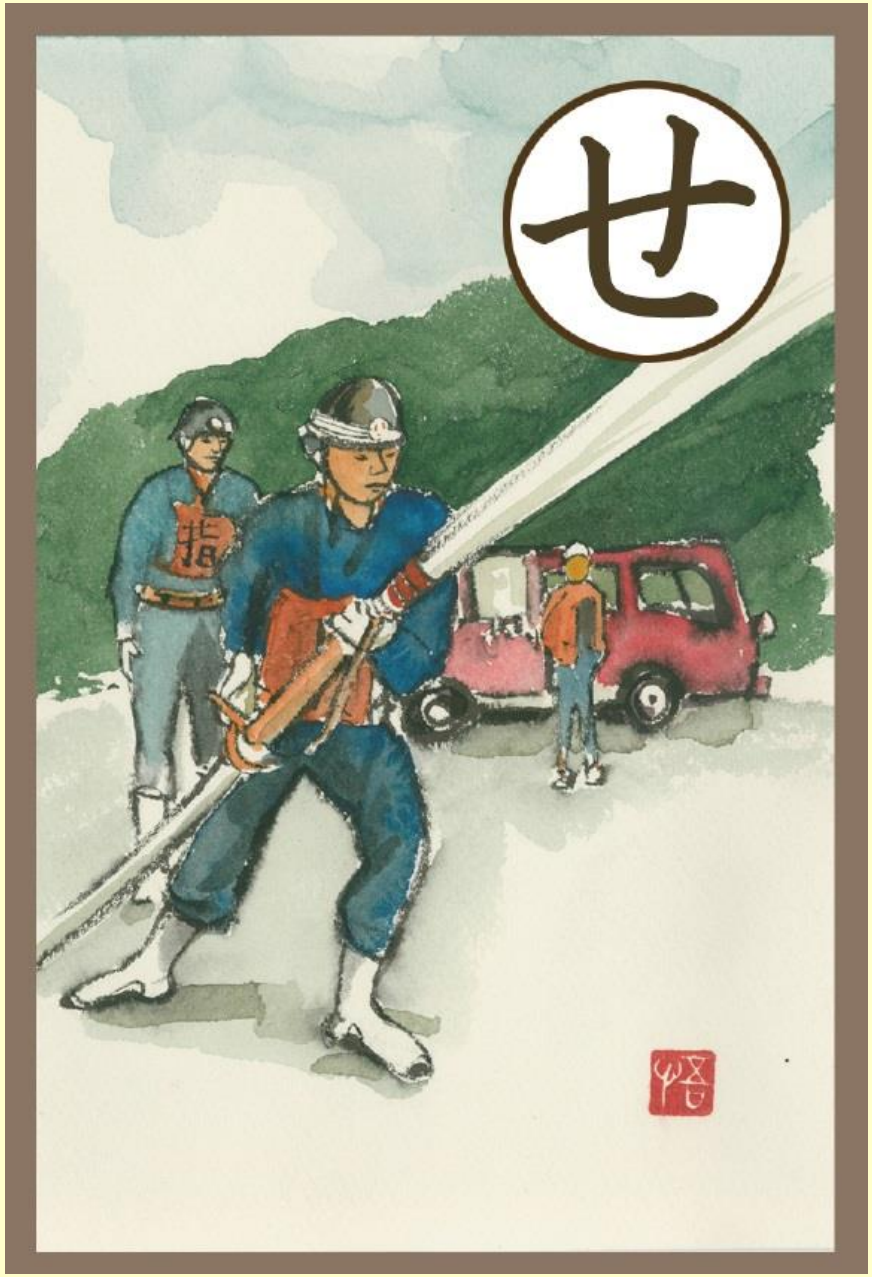


墨俣（すのまた）の　9割被災（わりひさい）　9・12

昭和51年（1976）9月12日午前10時28分頃、安八町大森の長良川右岸堤防が決壊しました。

洪水は、安八町を泥海と化し、更に上流の墨俣町へ逆流。午後3時には県道岐阜ー垂井線を越えて、当時の役場や小学校をはじめ町内全体に浸水し、ついに全町の92％が被災しました。

くしくも、東安中・墨俣小の両校舎が完成し、竣工式が予定されていましたが、中止となり、新校舎は避難所となりました。

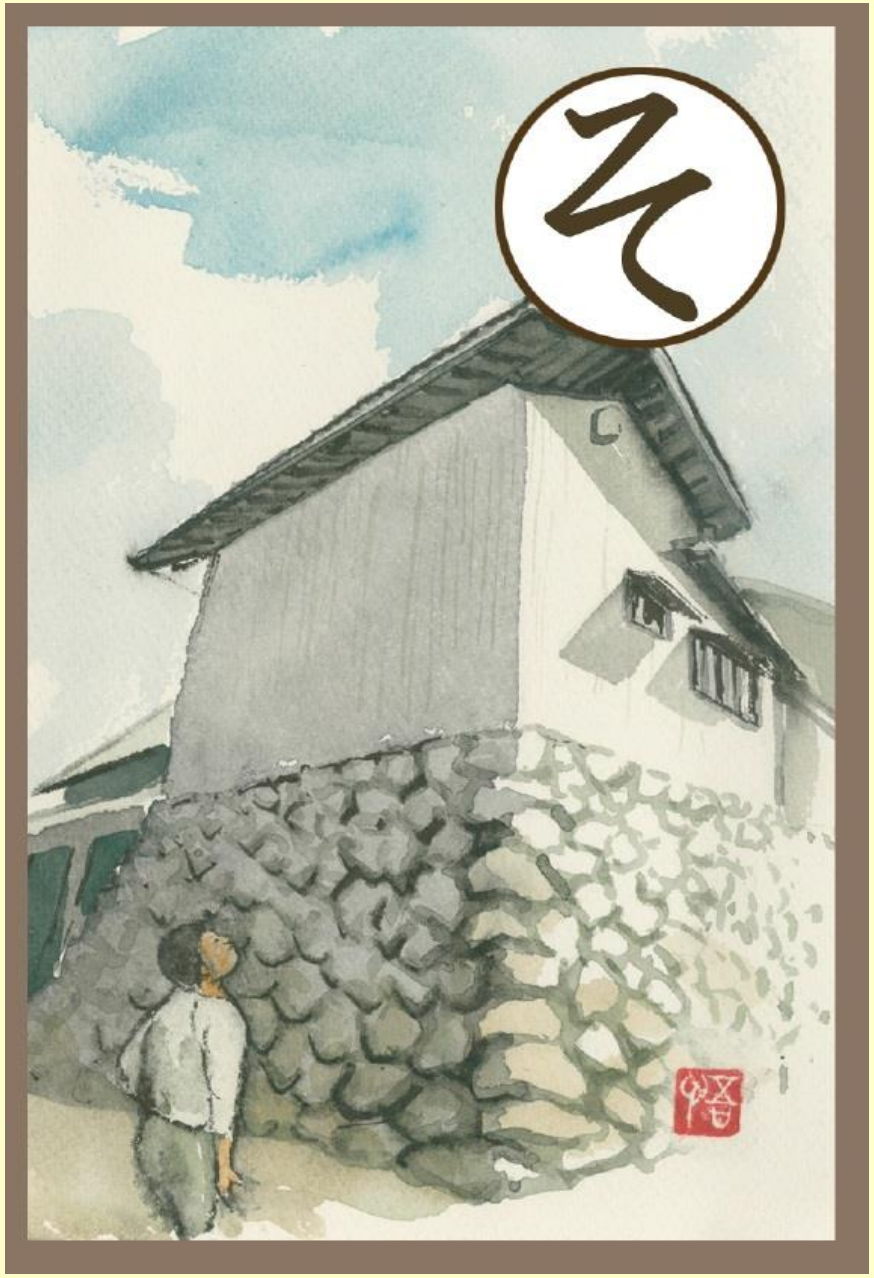


全国を　三度制した　消防団

（ぜんこく　さんどせい　しょうぼうだん）

昭和53年（1978）の第6回全国消防操法大会小型動力ポンプの部に出場し、初出場・初優勝。続く昭和55年の第7回大会自動車ポンプの部で優勝。同年11月、その実力が認められ、後楽園球場で開催された消防百周年記念「全国消防大会」において、3万7千人の観客の前で天覧操法を披露しました。

それから10年後の平成2年の第12回大会小型動力ポンプの部で優勝し、3度目の全国優勝を成し遂げました。



そそり立つ　石垣見あげる

奥田家水屋

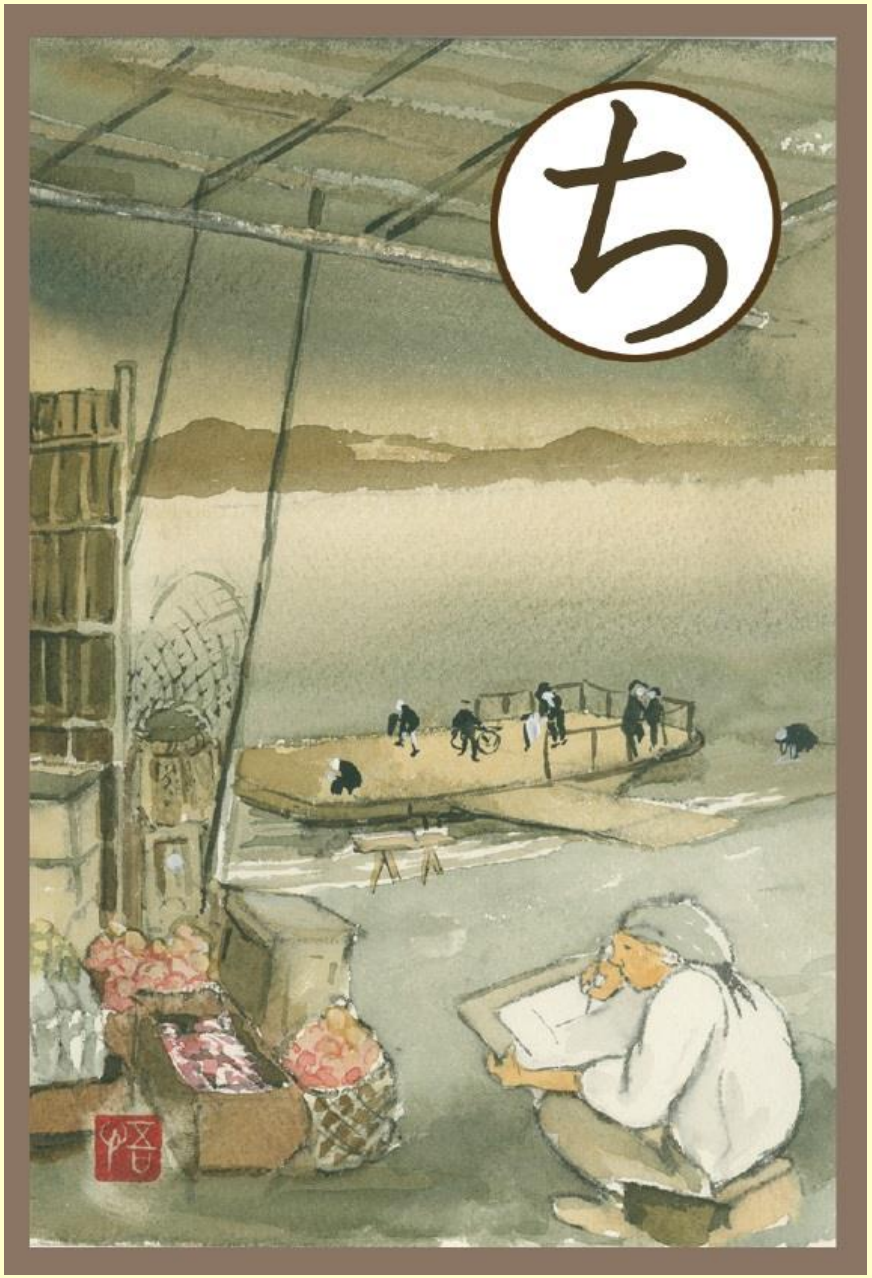
大正10年（1921）頃に建築された水屋で、倉庫としても活用されていました。住居と倉庫の機能を備えた水屋としては、墨俣地域に残る唯一の水屋です。母屋とは階段でつながれ、水害が起こった際にスムーズに避難できるよう配置されています。水屋内の居室には畳が敷かれ、炊事もできるなど、居住に適した造りになっています。

☆大垣市景観遺産

旅人(たびびと)も　鎌倉(かまくら)までの　ひと休(やす)み

京都と鎌倉を結ぶ道が、京鎌倉往還（鎌倉街道）です。古代の律令制度で定められた東海道と東山道を結ぶ官道が墨俣を通っていましたが、鎌倉時代になり街道として整備されました。

墨俣地域では、二ツ木と上宿に、街道筋が残っており、史跡が点在し、当時の面影を感じることが出来ます。



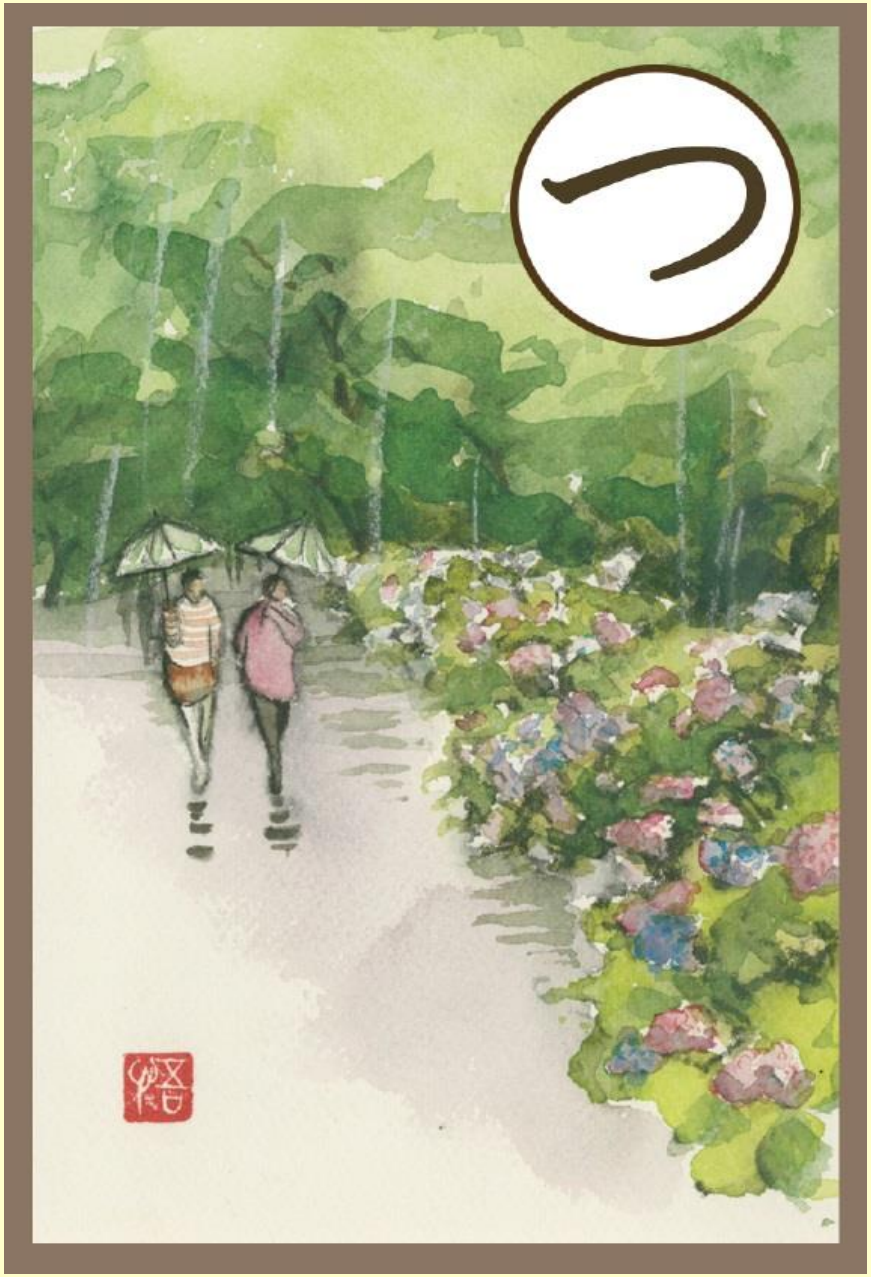
朝風（ちょうふう）が　描（えが）く渡船場（とせんば）　墨俣渡（すのまたわた）し

日本画家で、俳人の長谷川朝風（1901年～1977年）氏は、墨俣町本町に生まれ、目の病気に悩まされながらも生涯を画家として全うしました。

墨俣小学校で所蔵している、昭和初期の墨俣渡船場を描いた作品では、当時の墨俣渡しの様子がよくわかります。

なお、墨俣北霊園の墓碑には、次の自筆の句が刻まれています。

絵師われは　鍛冶の三男　月しぐれ



梅雨の下（つゆ　もと）

映える紫（は　むらさき）　あじさい街道（かいどう）

　犀川堤や、さい川さくら公園には、平成18年度から地域住民の手により植栽された約 6,000 本の薄紫やピンク、白色等の大輪のアジサイが、一帯に咲き誇ります。

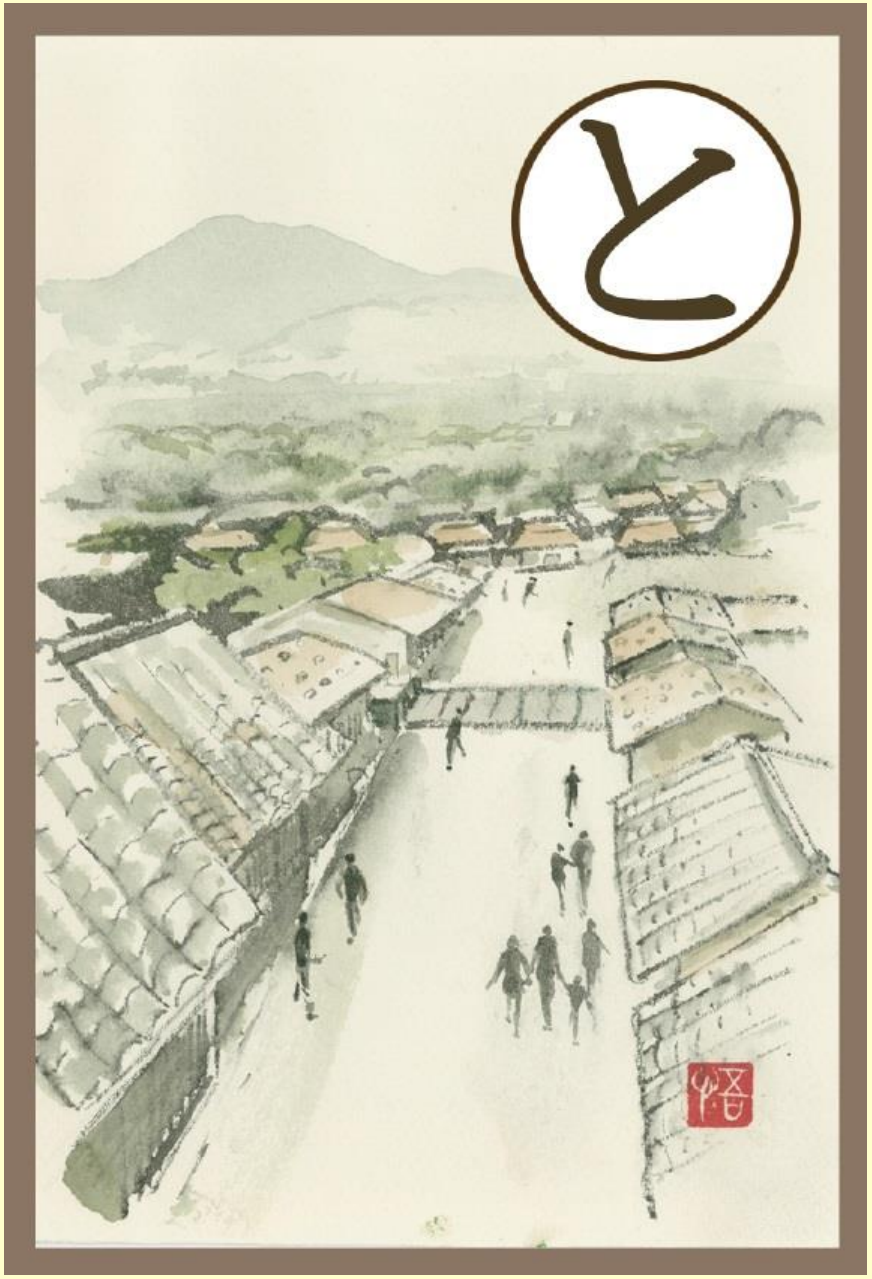
　6月には、「すのまたあじさいまつり」も開かれ、アジサイ見本市や育成講習会などのイベントが行われています。

天守に　さん然と輝く　金の鯱

てんしゅ　ぜん　かがや　きん　しゃち

鯱は、頭は虎で背にとげのある魚の形をした想像上の動物で、大海の水を飲み干し、非常の場合これを吐き出して身を守るといわれています。このため火災除けのため天守閣にあげられるようになりました。大きいほうが雄で小さい方が雌です。

サイズは雄が高さ120cm、長さ104cm、幅100cm、重量173kgの24金張りで、雌は雄よりもやや小さめです。大阪造幣局で製作されました。

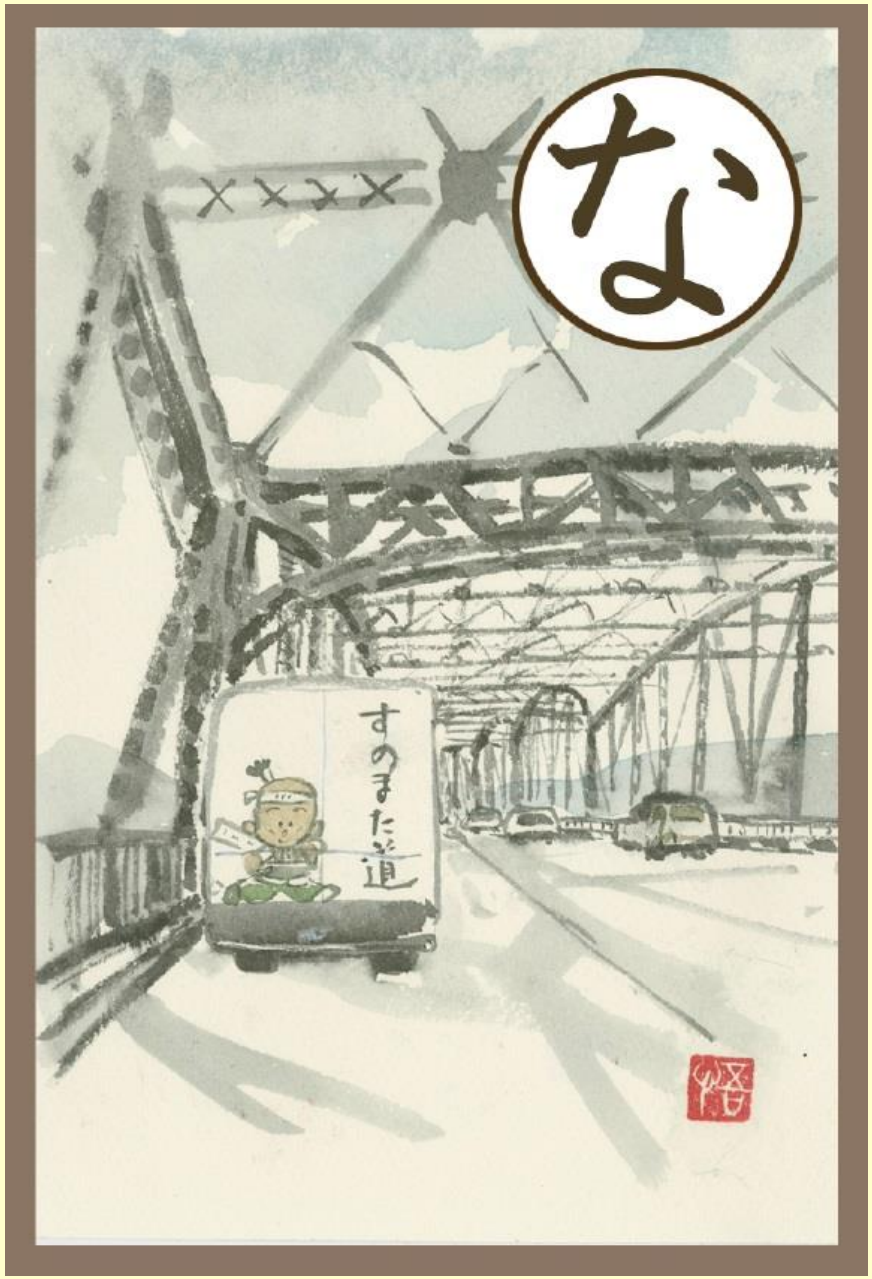


東西（とうざい）の　歴史（れきし）が通（かよ）う

美濃路（みのじ）かな

　美濃路は、江戸時代に東海道の宮宿と中山道の垂井宿とを結んだ脇街道です。東海道では、宮宿と桑名宿との間に七里の渡しがあり水難事故を避けるために、東西を移動するのに海路を避けられる美濃路が好まれることがありました。

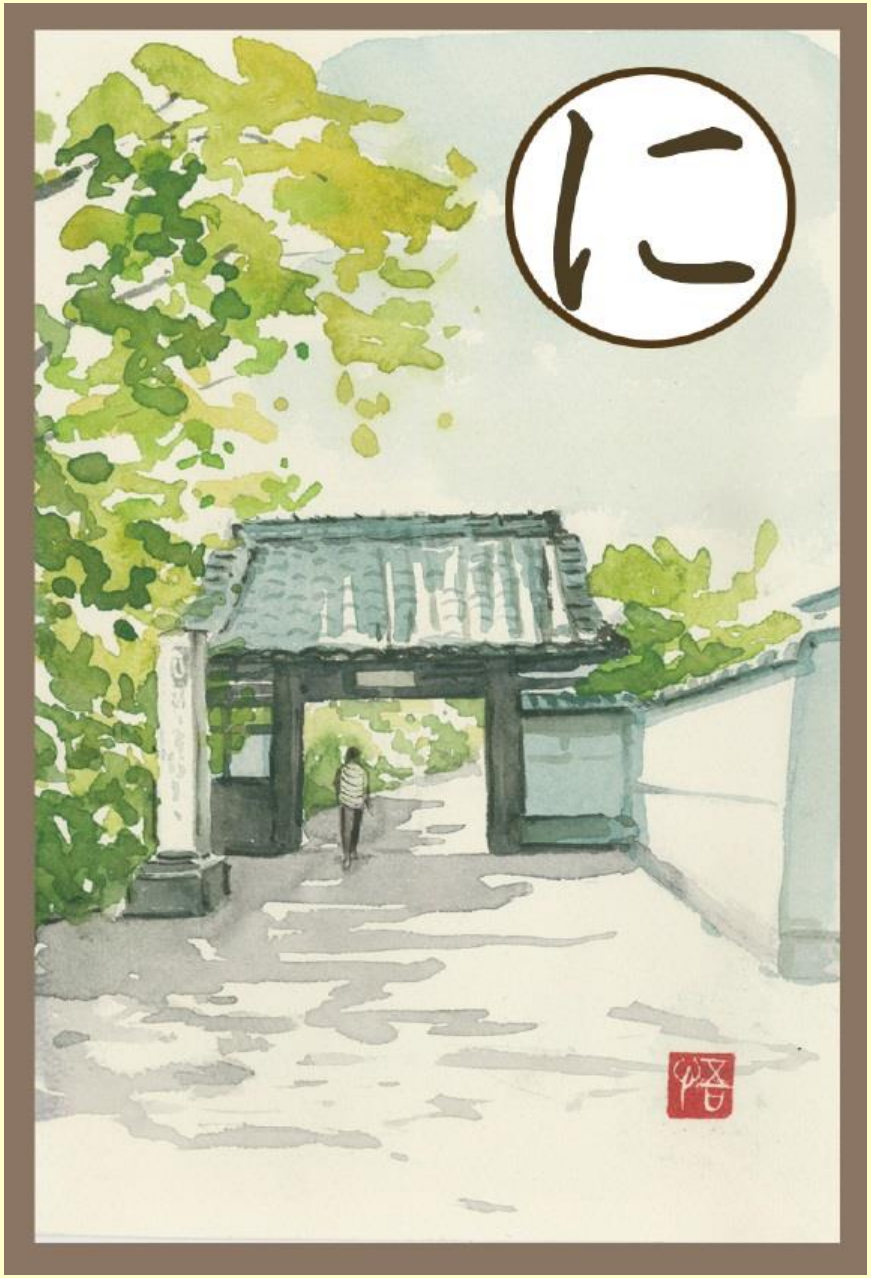
　尾張の起宿から2里17町25間（約9.8km）、大垣宿から2里50間（約7.9km）の道のりがある墨俣宿は、宿駅の長さが7町7間（約776m）で、かぎ形になっています。道幅も3間（約5.5m）から5間（約9m）で、本陣や脇本陣をはじめ、商家が道の両側に肩を並べて建っていました。



長良大橋（ながらおおはし）　地域をつなぐ（ちいき）　虹の橋（にじはし）

昭和8年（1933）に建設された鉄橋で、長良川にかかる曲弦ワーレントラス橋として美しい姿をしています。同時期に建設された揖斐大橋と構造がよく似ています。また、この付近は墨俣の渡船場があった場所で、交通の重要な役割を果たしてきましたが、その後、自動車による往来が盛んになると渡船場は姿を消していきました。長良大橋は、まさに街道と渡船の歴史から国道と車の歴史への転換期に建設された橋で、近代土木遺産として非常に価値のあるものです。

☆大垣市景観遺産



西美濃の　十九番札所　明台寺

（にしみの　じゅうくばんふだしょ　みょうだいじ）

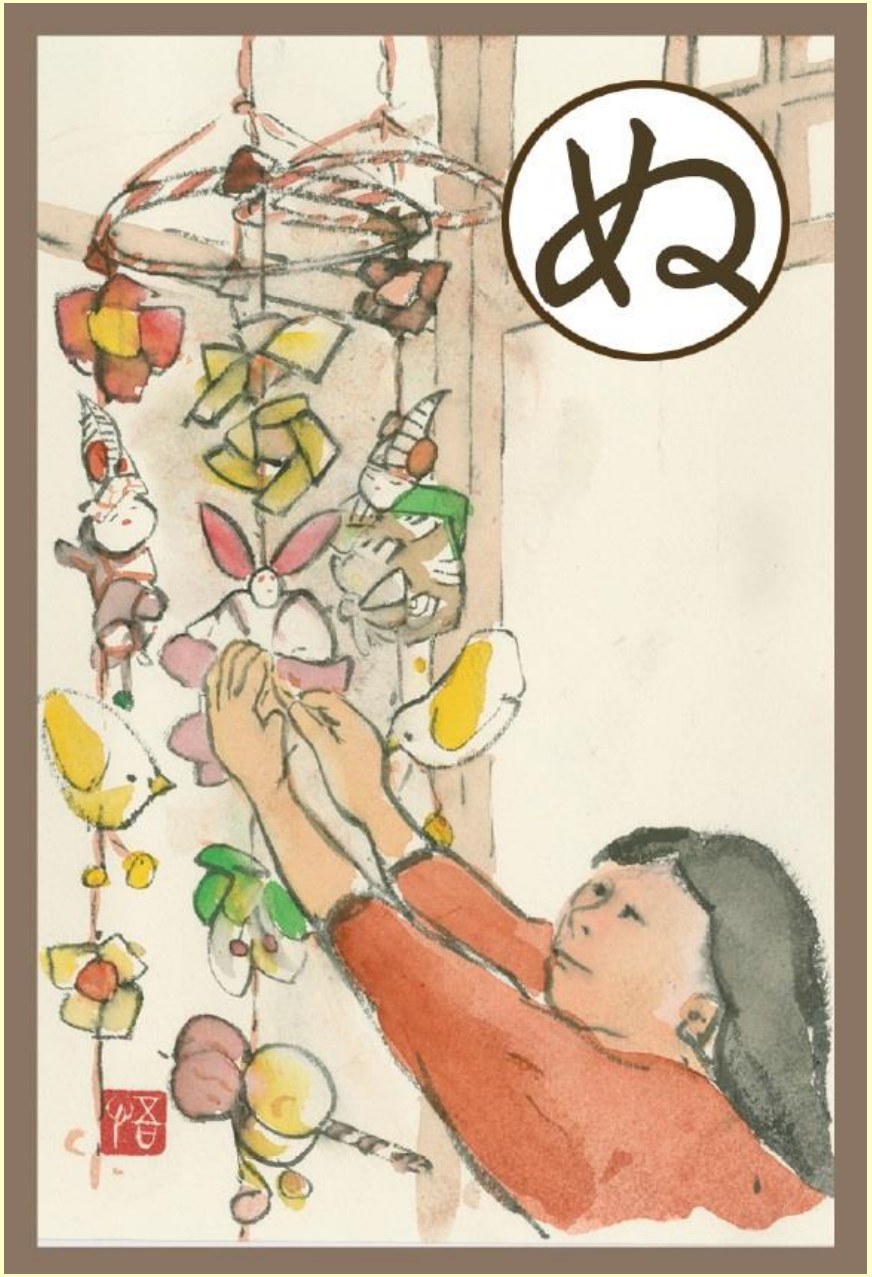
浄土宗西山禅林寺派。

西美濃三十三霊場第十九番札所。

境内には、斎藤利藤・利国父子の墓や土岐悪五郎の墓のほか、頼山陽がこの地に投宿したときの墓碑文が残されています。

また、橋にまつわる伝説をもつ「橋杭笑地蔵尊」も安置されており、朱雀天皇の勅使が天慶2年(939)に墨俣地蔵堂で雨宿りをした際に詠んだ句碑が境内にあります。

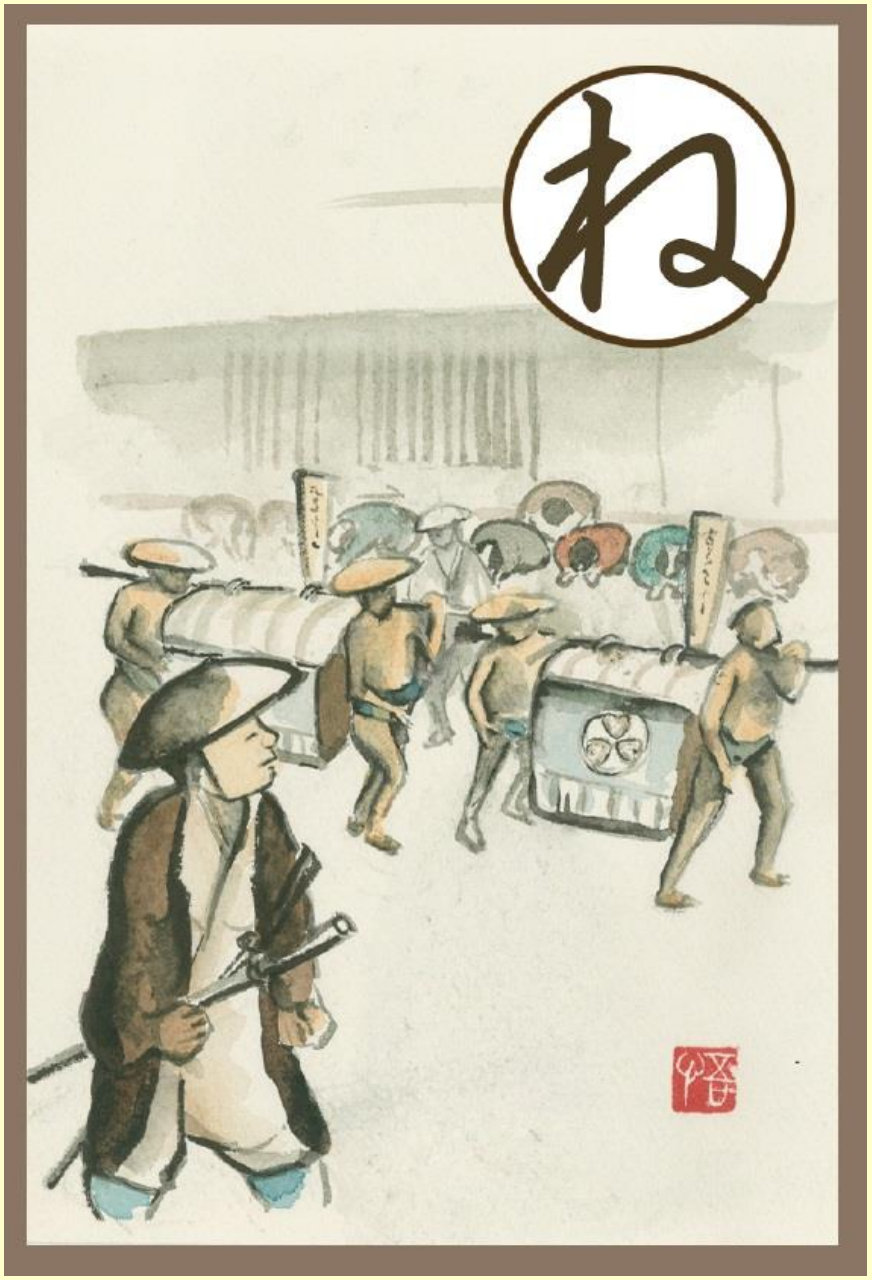
朽ち残る　真砂の下の　橋ばしら
また道かへて　人渡すなり



縫(ぬ)い上(あ)げる

思(おも)いを込(こ)めたつるし雛(びな)

つるし雛(つりびな)は、着物の古布で、花や動物、人物等をモチーフとして縫い上げ、それらを紐で繋げて吊るしたものです。小さな飾りに子どもの健やかな成長を願う優しさが込められています。旧美濃路墨俣宿一帯では、毎年、2月下旬から3月上旬に、「いき粋墨俣つりびな小町めぐり」が開催され、寺院、商店、墨俣一夜城など、町が華やかに彩られ、紙芝居やスタンプラリー、写真コンテストも行われています。



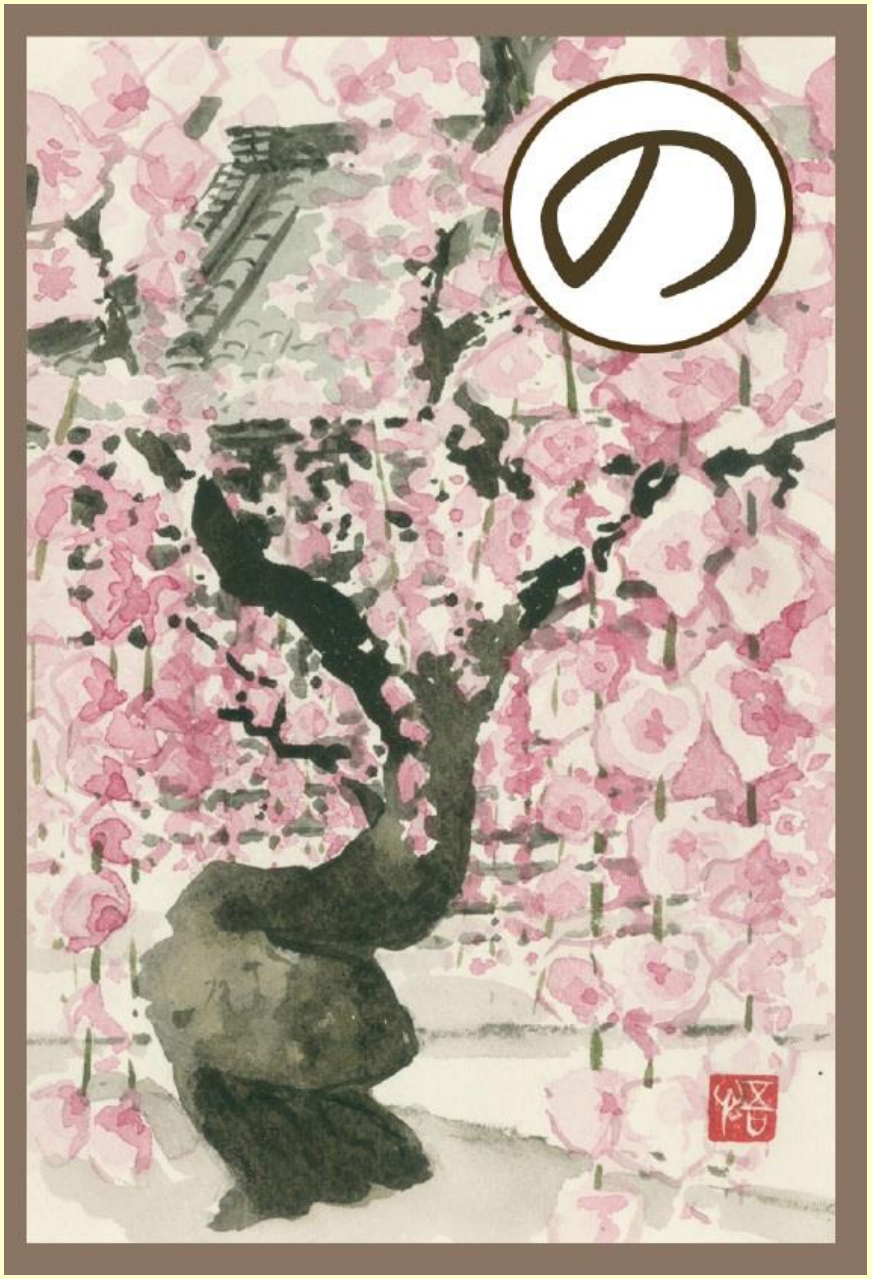
年中行事（ねんじゅうぎょうじ）

将軍御用（しょうぐんごよう）の お茶壺道中（ちゃつぼどうちゅう）

お茶壺の通行は、江戸時代の街道における年中行事の一つで、将軍飲料のお茶を、宇治で調整し3個の信楽の壺に入れて、江戸に送っていました。

お茶壺の通行は、たくさんの荷物が運ばれましたので、厳重な警戒を敷き、貴賓同様に扱われました。

墨俣宿の通行は元禄6年(1693)6月が始まりで、天保11年(1841)6月7日には墨俣宿本陣に宿泊しています。

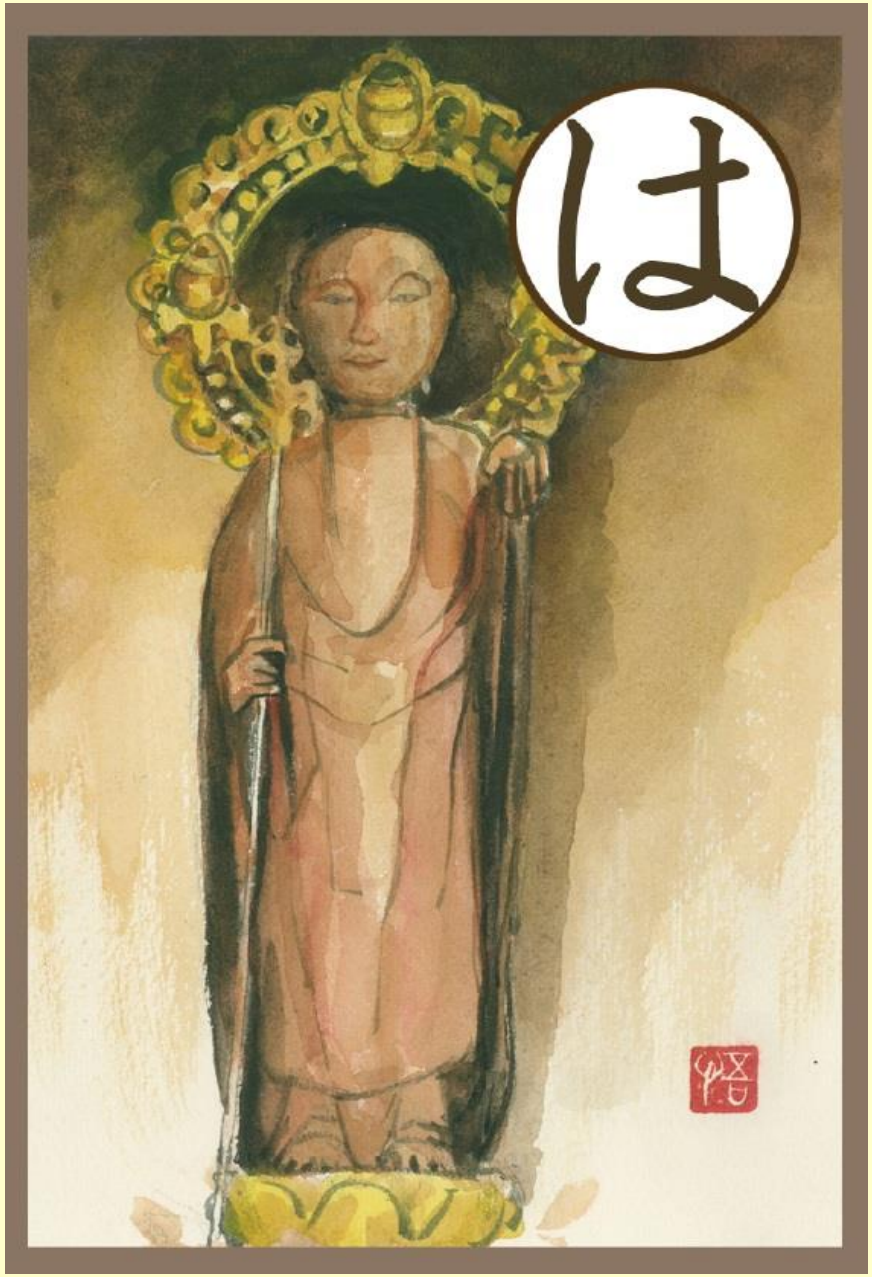


残(のこ)り香(が)漂(ただよ)う　花(はな)びら飾(かざ)る

しだれ梅(うめ)

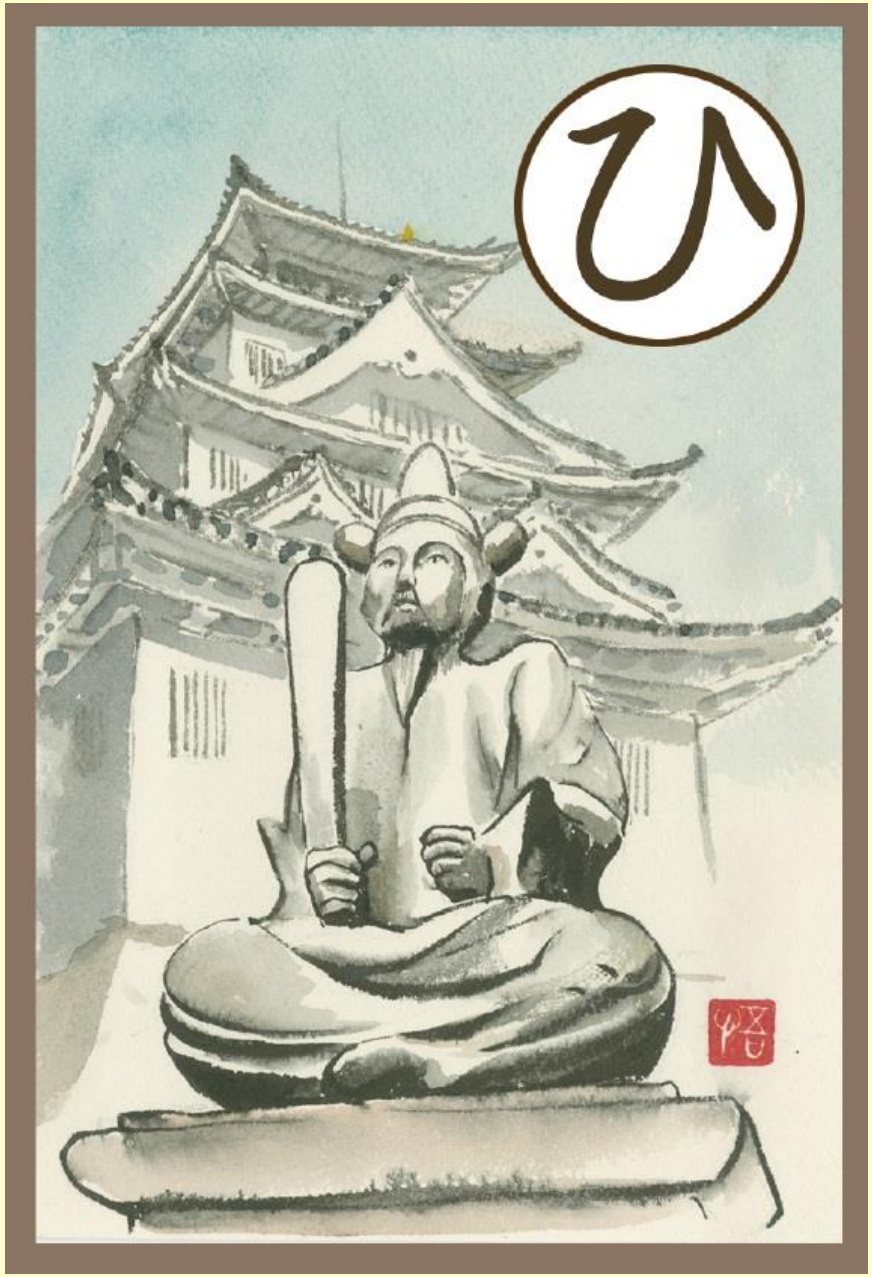
　真宗大谷派の光受寺は、寛永10年（1633）に、柴間（現在の西町）から寺町に移転してきました。

　境内にはミニギャラリー聴風庵があり、四季折々の花を愛でることができます。特に紅白のしだれ梅（飛龍梅）が見事で、開花時期には境内が梅の香りで満ち溢れます。



橋杭(はしくい)に　祈(いの)りをこめて　笑地蔵(えみじぞう)

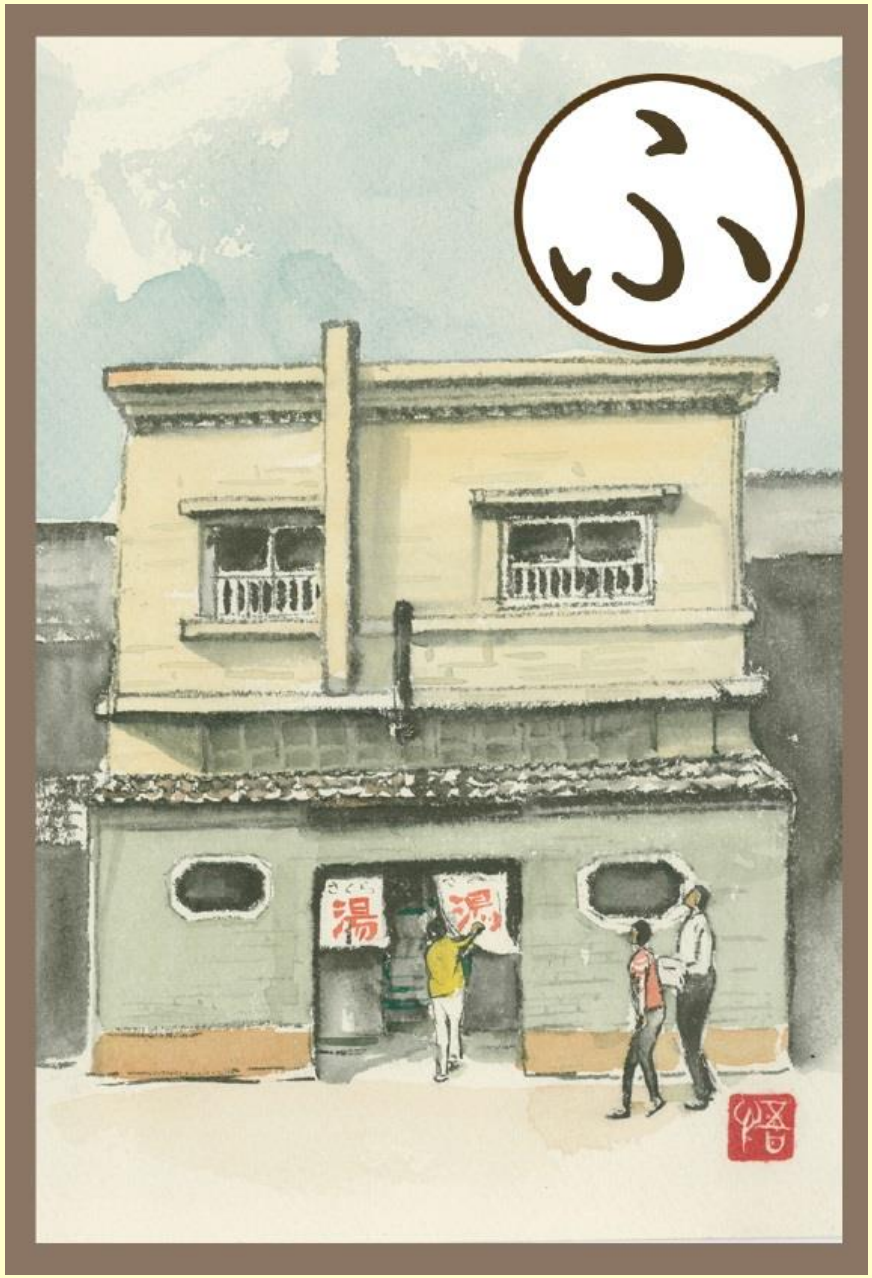
明台寺に安置してあり、40年毎に御開帳される「橋杭笑地蔵」は、今から一千有余年も昔、墨俣川（長良川）で金色に輝く地蔵尊に似た橋杭が見つかり、それを村人が祀ったのが始まりで、都でこの話を聞いた嵯峨天皇の時代に小野篁が地蔵尊に仕上げたといわれています。その後、後朱雀天皇の勅使が京より関東へ下る時、「橋杭笑地蔵大菩薩」と名づけました。



秀吉の　出世夢みる　一夜城
（ひでよし　しゅっせ ゆめ　いち や じょう）

木下藤吉郎出世物語の出発点となった墨俣城の城あとに、当時の砦としての城ではなく、町のシンボルとしての「城郭天守」様式の歴史資料館として、平成３年４月に開館しました。

館内では、築城への道等を展示しており、若き日の秀吉に出会えます。また、展望室からは長良川や金華山をはじめ伊吹山、養老山脈などが一望でき、四季折々の眺めが楽しめます。



古き町　今も残れり　銭湯跡
（ふるまち　いまのこ　せんとうあと）

昭和55年まで営業していた桜湯の建物は、前面がカラフルなタイル張りで、玄関には文字が入ったタイル画がありました。軒下のクラシックな飾りと2階部分の垂直性を強調する付け柱が戦前の昭和のモダンなデザインを伝えていました。

桜湯の建物は平成22年10月に大垣市景観遺産に指定されていましたが、残念ながら平成31年2月に取り壊されました。

かつて墨俣町内には、3軒の銭湯があり、桜湯のほかに、中町と本町（栄湯・昭和46年廃業）にありましたが、廃業され建物も取り壊されています。

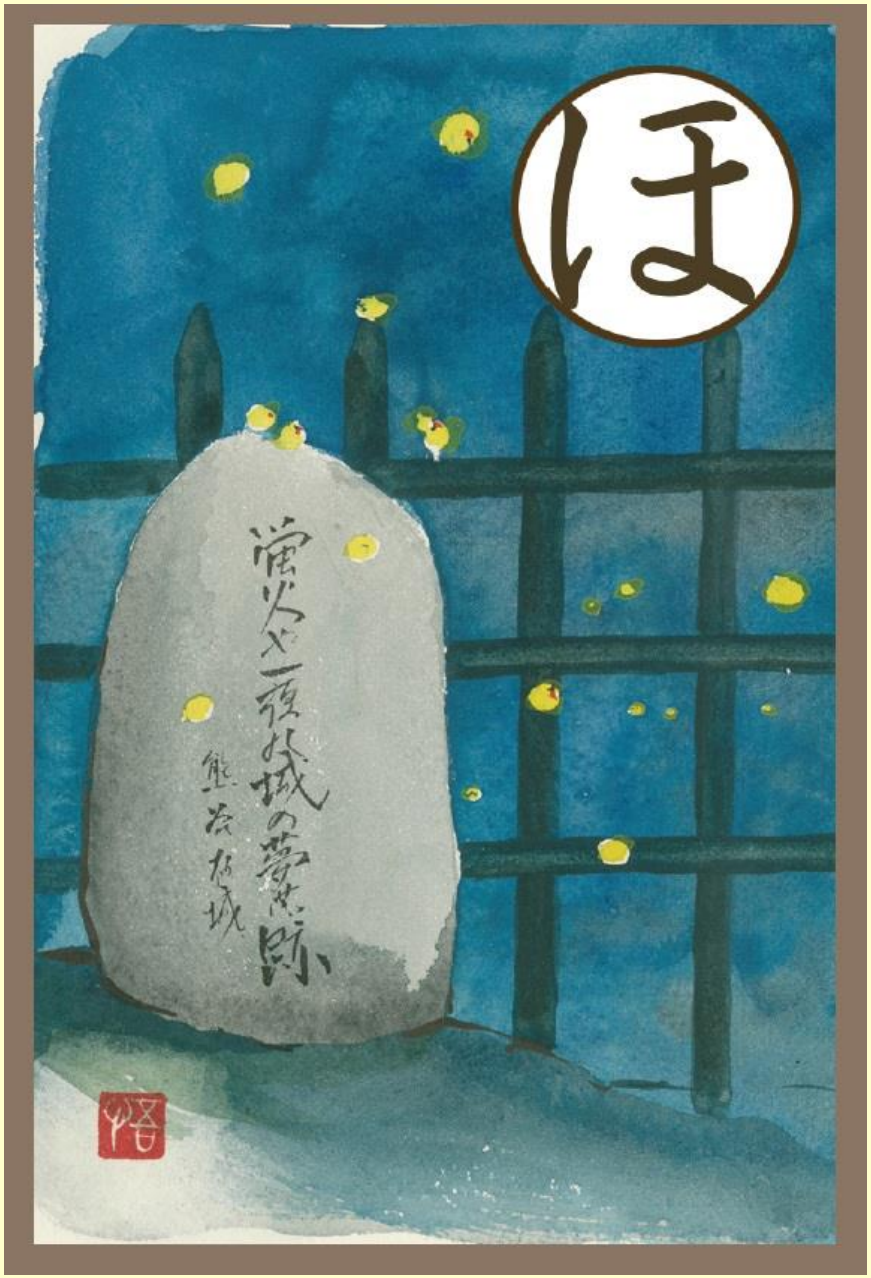
※本カルタの制作時には建物が現存していたため、このような読み札の表現になっています。

平氏と対峙（へいし　たいじ）

義円の奮闘（ぎえん　ふんとう）　痕跡残す（こんせきのこ）

養和元年（1181）、墨俣川（長良川）をはさんで平重衡を総大将とする七千余騎の平氏が西岸に、新宮十郎行家、源義円ら三千余騎の源氏が東岸に陣を整え、源平一大合戦がはじまろうとしているときに、義円は、行家に先をこされまいと一人馬で西岸へ一番乗りをしようとしましたが、平盛綱に討たれてしまいました。

下宿の義円公園内には義円地蔵が祀られ、里人の手により、毎年3月11日の命日に供養が行われています。



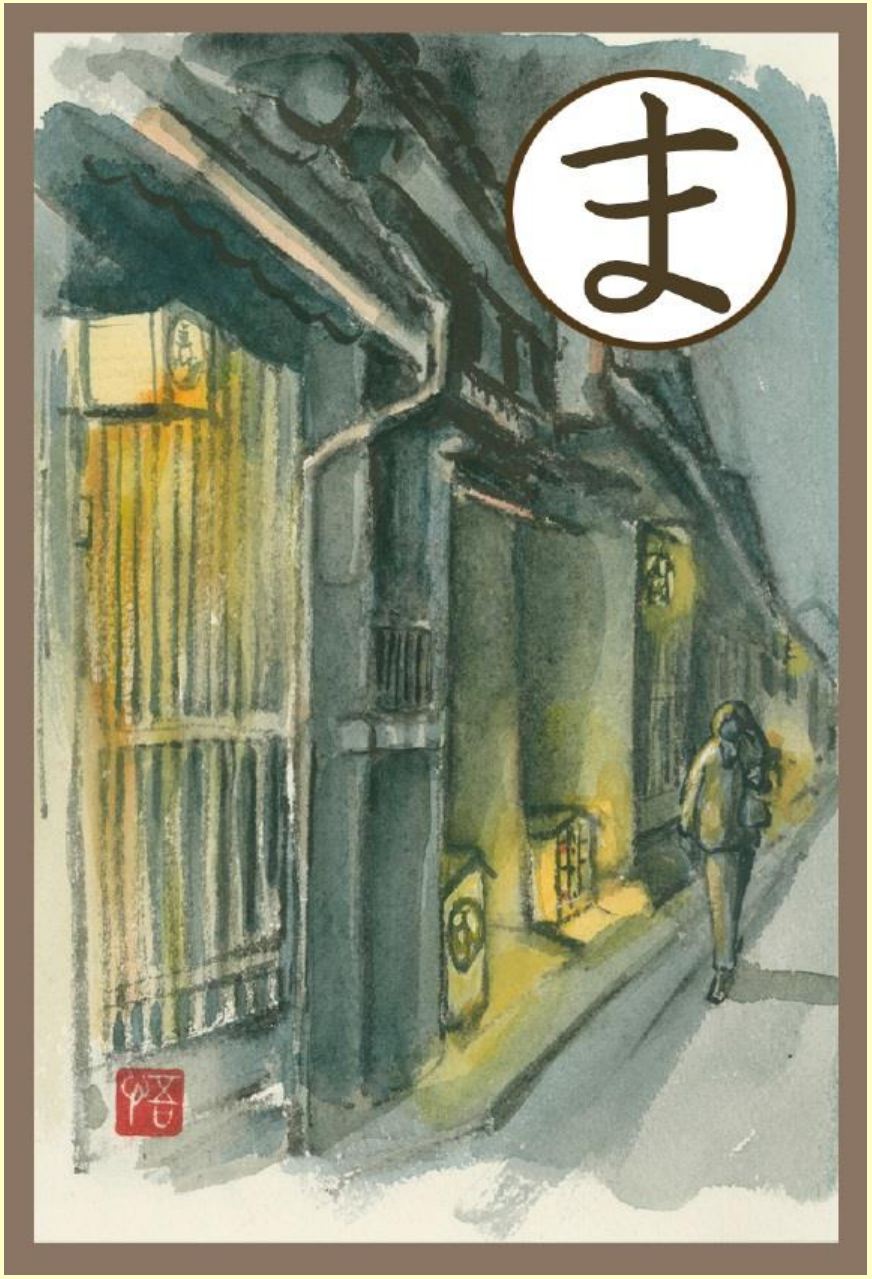
ほたるび
蛍火や

いちやしろ　ゆめあと
一夜の城の　夢の跡

（熊谷夜城）

この句は、明治時代に俳人として活躍した熊谷夜城のもので、句碑が一夜城址公園にあります。

夜城は、満福寺の住職で、名を祐綱といいました。明治41年10月には、美濃派以哉派の中心的な指導者となり、派の教えを継承する道統という位（25世）に就き、美濃の俳諧の指導的役割を果たしました。また、近隣の人々は、夜城を慕って「墨俣炉扇吟社」をつくり、句会を催し楽しみました。



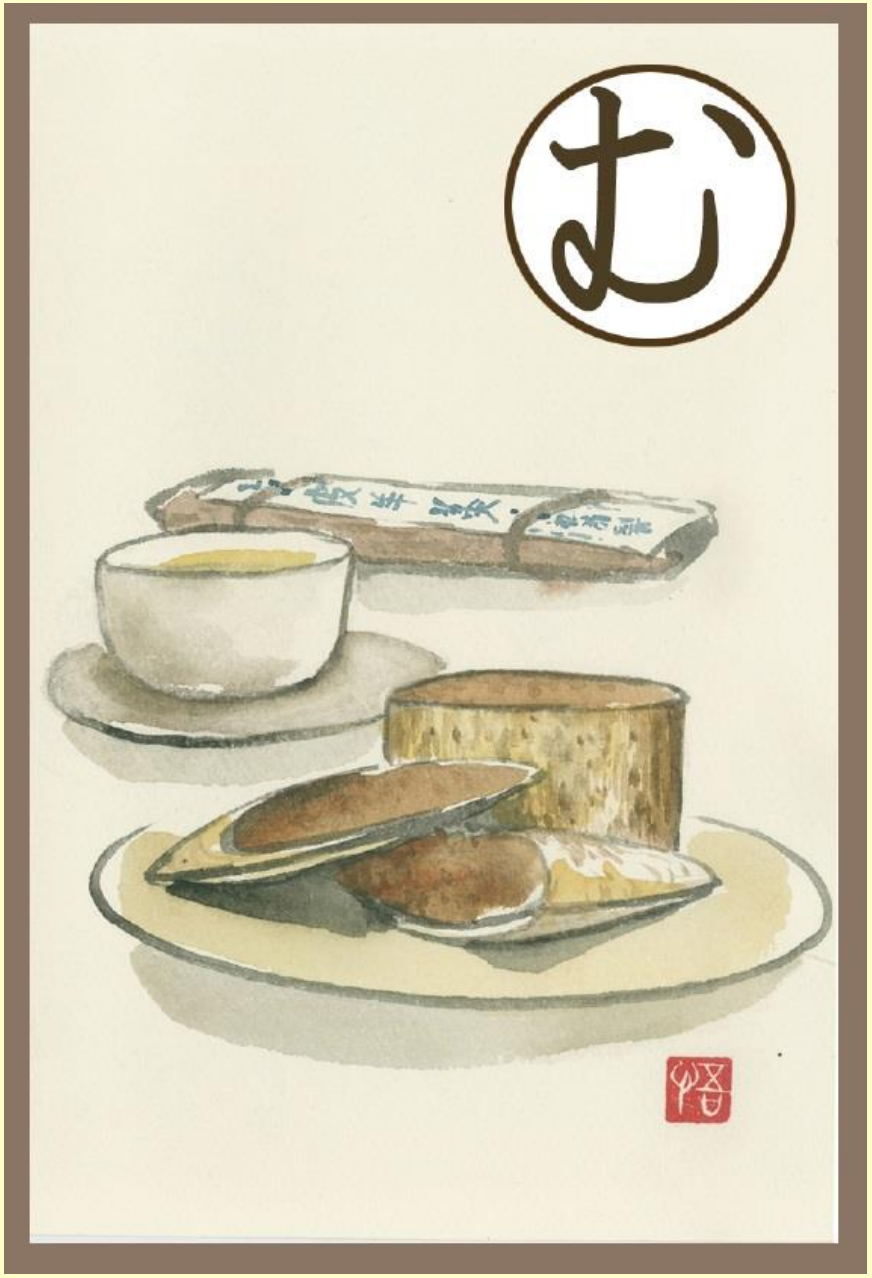
町中（まちなか）に　行燈（あんどん）ともる　美濃路（みのじ）かな

　大垣市の美濃路墨俣宿修景整備モデル事業を墨俣地域まちづくり協議会が受託し、平成26年度から28年度にかけて設置推進しました。美濃路墨俣宿の雰囲気を醸し出し、まちの魅力を高めるために、共通モチーフによる行燈を212世帯の協力を得て設置しました。

道しるべ　七墓連中の　地蔵菩薩

（みち　ななはかれんじゅう　じぞうぼさつ）

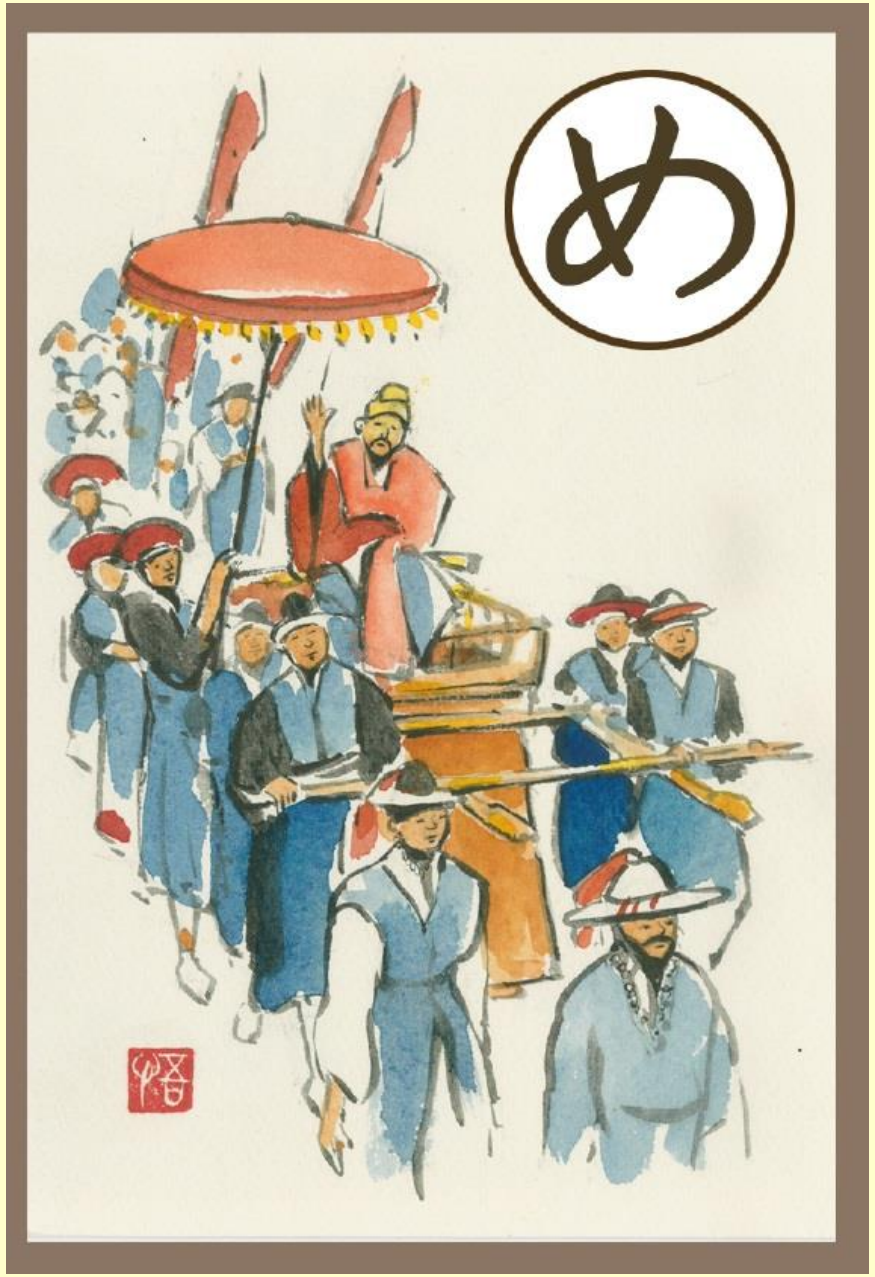
　二ツ木に地蔵菩薩の立像を彫り出した道しるべが立っています。明治42年に、二ツ木の七墓連中の人々により建立されたものです。七墓は、元々は御詠歌を詠いながら寄付を集める宗教活動であったのが、次第に御詠歌に似た節回しで、時の話題や事件、浄瑠璃や昔話などを、銅鑼を打ち、笛を吹き鳴らしながら村々を回ったもので、大変人気がありました。明治から大正時代がもっとも盛んでしたが、次第に衰退し、残念ながら今では途絶えてしまいました。



昔の味を　今に伝える　皮羊羹
（むかし　あじ　いま　つた　かわようかん）

墨俣名物「皮羊羹（かわようかん）」は、竹の皮で包まれた蒸し羊羹です。形状は、京都や滋賀の「丁稚羊羹」に似ており、素朴でなつかしい味です。

かつては、近江屋、松寿園、正永堂、和泉屋といった墨俣町内の和菓子屋で製造販売されていましたが、現在（平成30年7月）では、松寿園のみで製造販売されています。



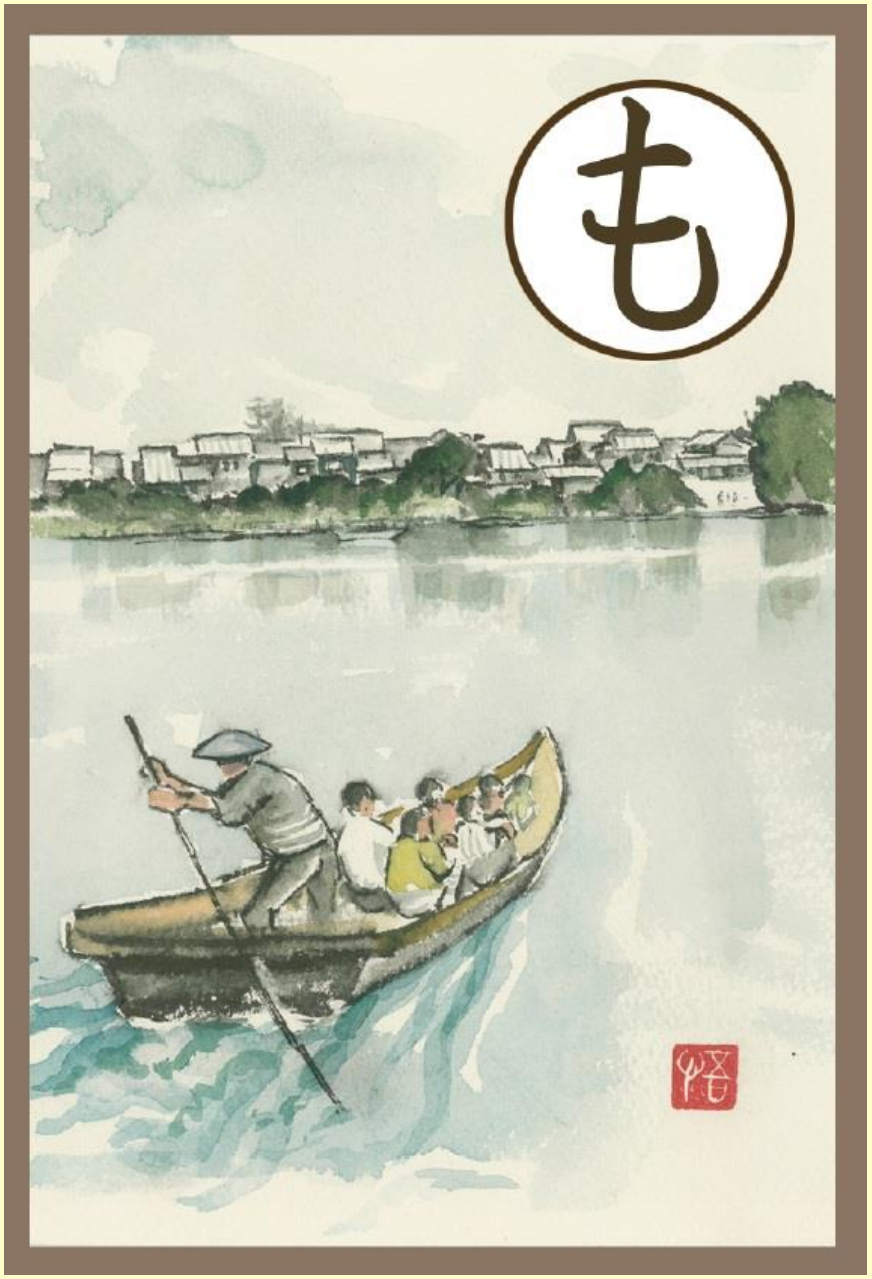
目を見張る（めみは）

きらびやかな　朝鮮通信使（ちょうせんつうしんし）

朝鮮通信使は、朝鮮国王が徳川将軍家に派遣した使節団で、時には500人をこえる行列が当時の美濃路をたどりました。

朝鮮使節の来朝は12回ですが、墨俣を通行したのは10回でした。また、沿道の大名たちは船橋や道路、宿舎を整備し、警固につとめ接待の費用を負担しました。

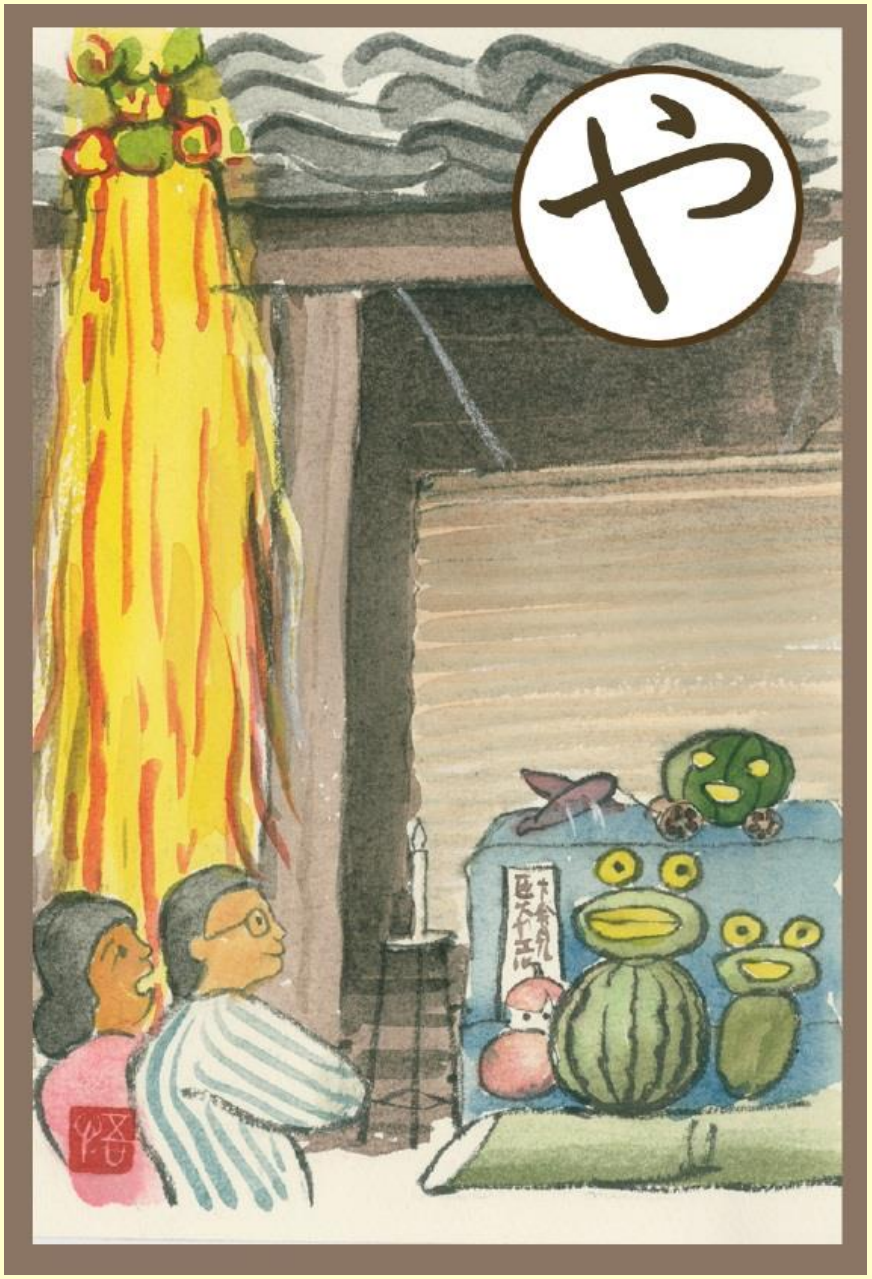
平成29年に「朝鮮通信使に関する記録」がユネスコ世界記憶遺産に登録されました。



物思い　かつての川町　懐かしみ

（ものおも　かわまち　なつ）

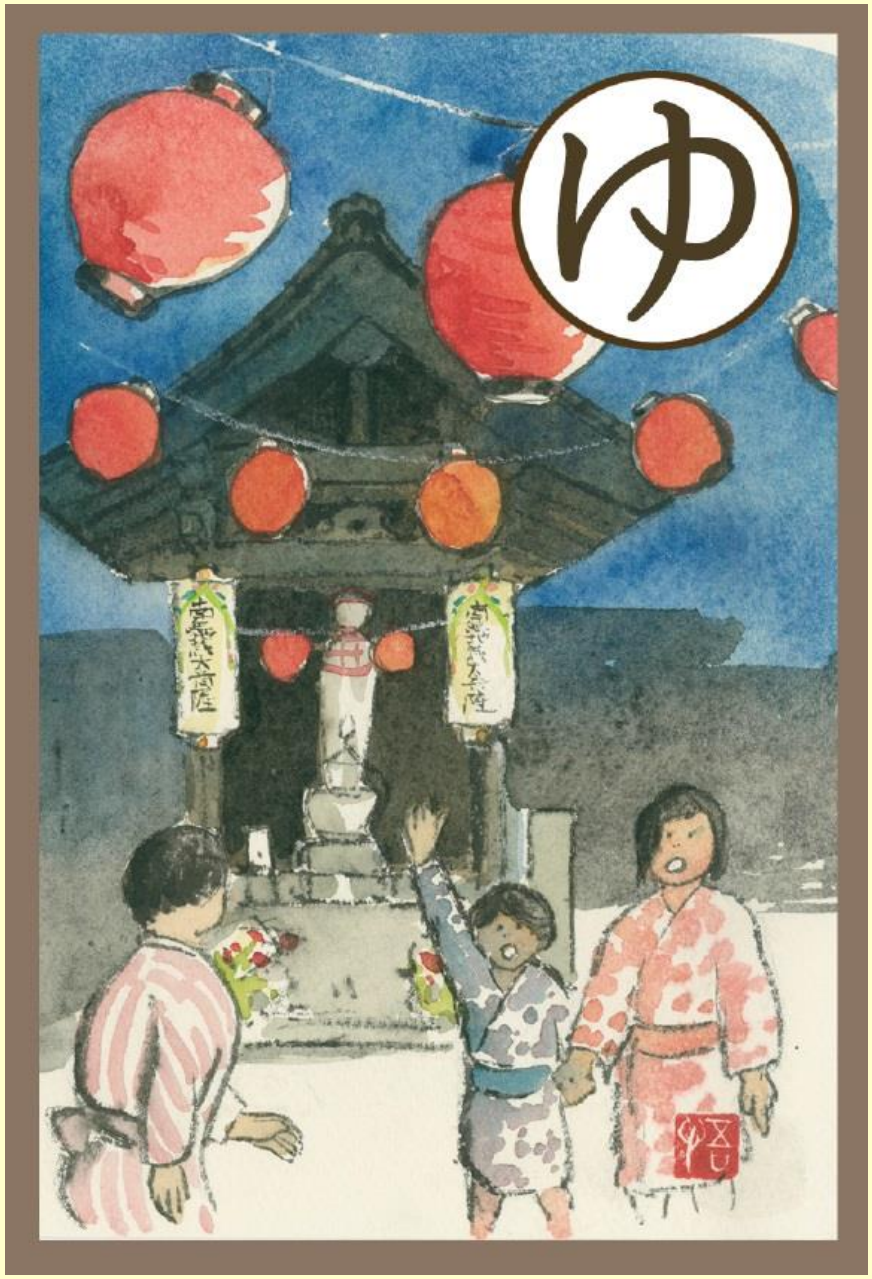
昭和初期まで長良川沿いにあった川町（川端町）は、犀川事件（「れ」参照）を経て、犀川改修工事（昭和7年（1932）着工）で消えました。川町には渡船場があり、役場、派出所をはじめ料亭、薬屋、酒屋、菓子屋等、40戸ほどの各種商店が軒を連ね、夕暮れ時には紅灯弦歌で賑わっていました。



野菜使う　手作りアートの　天王祭

（やさいつかう　てづくりアートの　てんのうまつり）

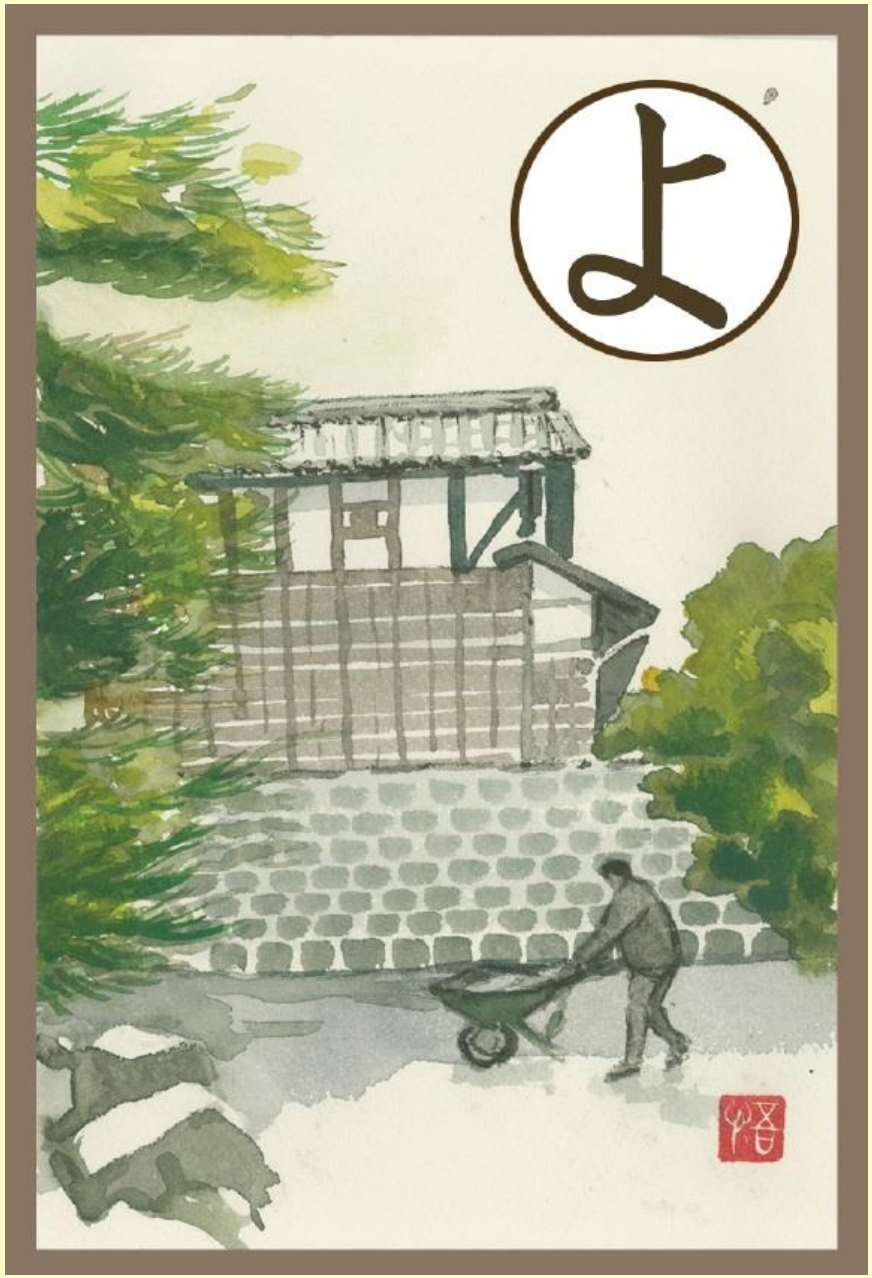
天王祭は、毎年7月に夏の風物詩として、大変にぎわいます。この祭りは、尾張津島神社の分身である墨俣の津島神社（旧天王社）に伝わり、川の恩恵に感謝する一方、川から受ける災害の無事息災を祈るもので、美濃路ができた慶長初期の頃に始まったといわれています。また、祭り当日は、町内毎に作られるダシ（作り物）が、野菜、果物、農作物や日常生活用品等を材料とし、芸術的な物から時代を風刺した物が軒先などに展示され、訪れる人々の目を楽しませています。



夕涼み　子らが集まる　地蔵盆

「地蔵盆」は、毎年8月24日（旧暦7月24日）を中心に行われる伝統的な行事で、昔からお地蔵さんの祠がある町内や寺院では、赤い提灯を飾り付け、お供えをして、町内安全や子どもの健全育成を願う行事として受け継がれています。最近まで、明台寺では子ども映画会などが行われ、子どもたちにとって夏休み最後の楽しい行事でした。

現在でも、明台寺や墨俣北霊園をはじめ、西町、二ツ木、下町、上宿、下宿の各地域で行われています。

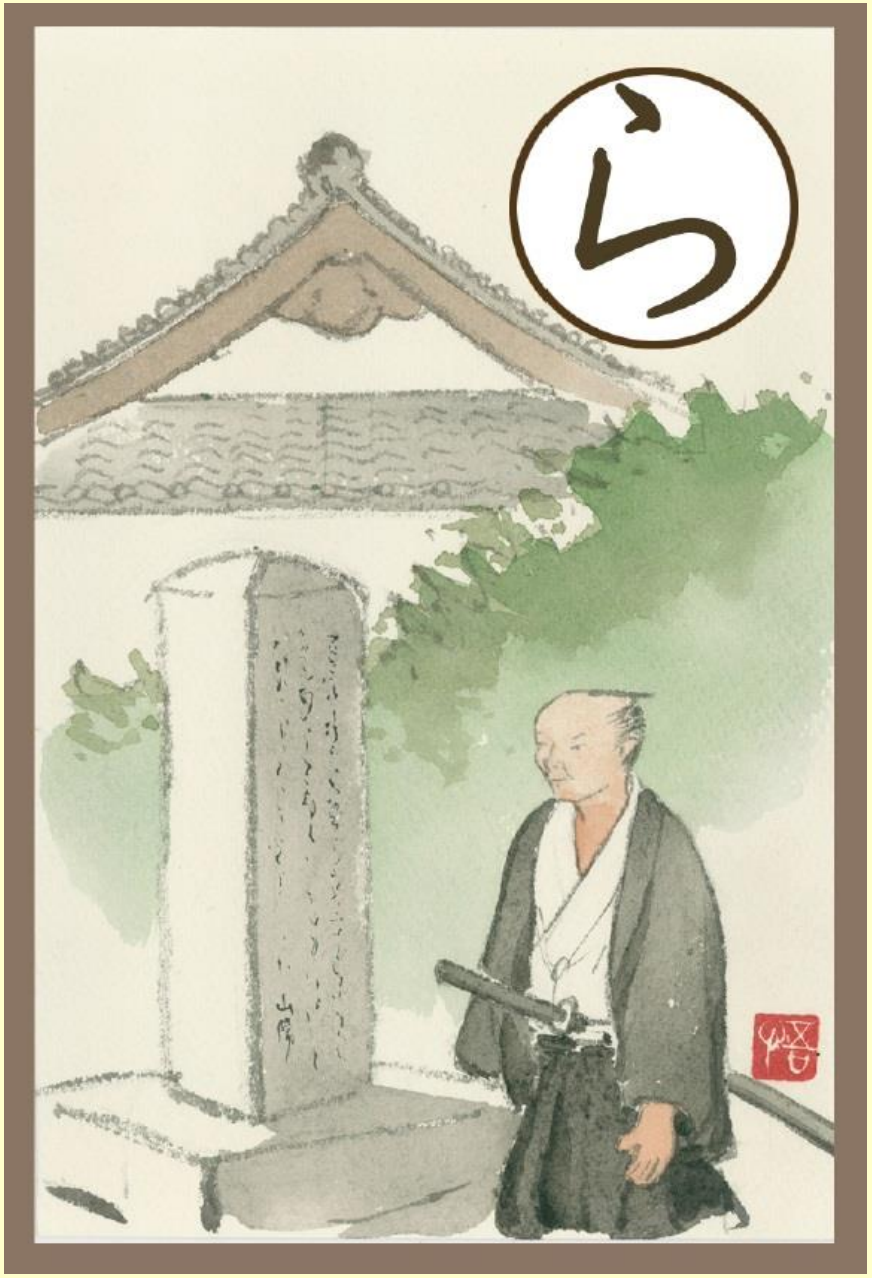


よねやま け
米山家

じゅうきょしきみず や　　ほ ぞんしょくそな
住居式水屋に　保存食備え

離れ家として使われていた住居式の水屋で、墨俣地域の輪中の象徴ともいえる建物です。墨俣地域には、昭和50年代（1975－1984）に14棟ほどの水屋がありましたが、現在は2棟しか残っていません。米山家水屋は、住居式の水屋としては、この地域に残る唯一の水屋です。

☆大垣市景観遺産

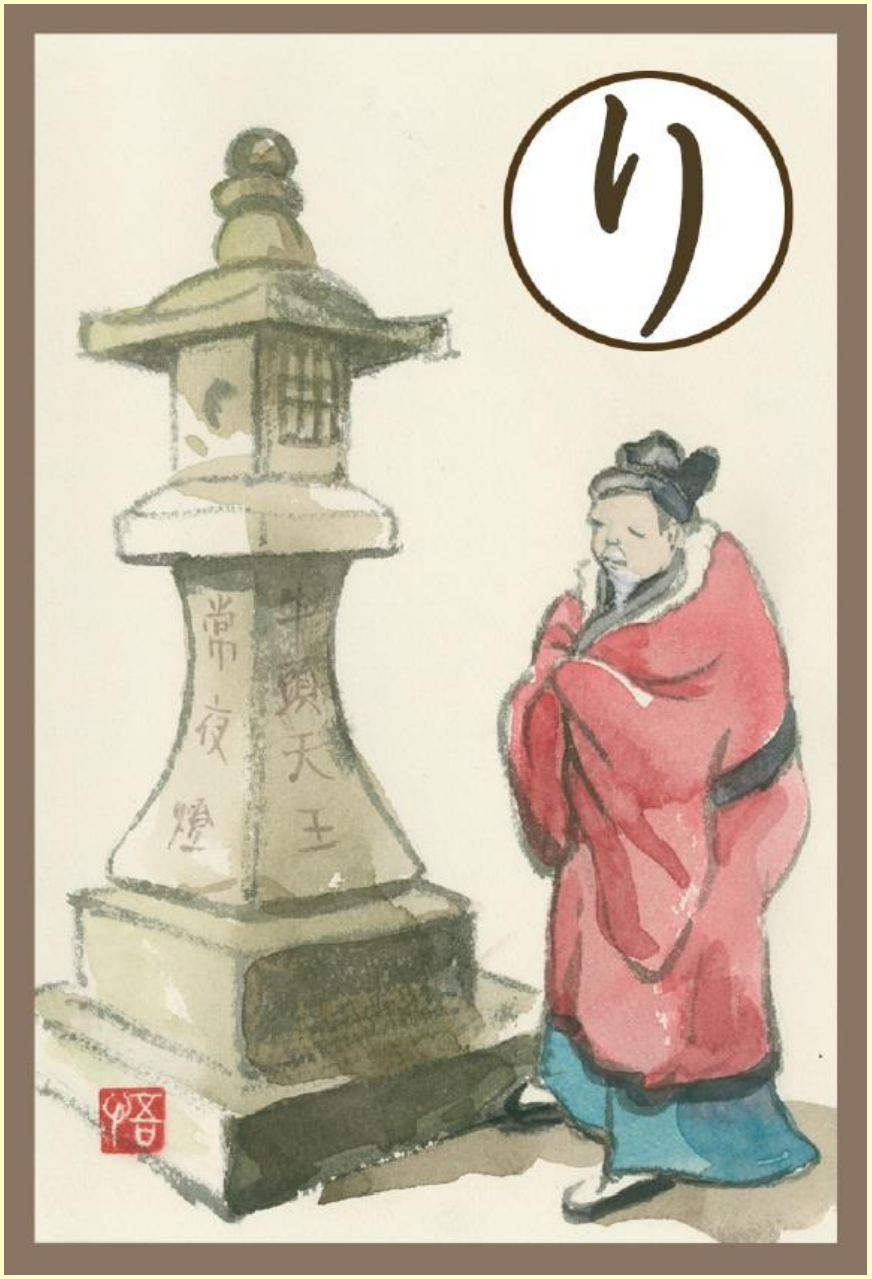


頼山陽の 碑文を発見 明台寺

江戸後期の儒学者・漢詩人・歴史家・書家である頼山陽は、各地を遊歴し、文人墨客と交わり、すぐれた詩文や書を遺しました。著書に「日本外史」などがあります。

頼山陽が来遊の折、墨俣の澤井儀左衛門（長愼）宅に宿泊し、親交を深めました。

また、長愼が、頼山陽に父の墓銘（碑文）を依頼し、碑文を記した墓が明台寺墓地に残っています。



琉球使節　通行ゆかりの　石燈篭

りゅうきゅう し せつ　つうこう　いしどうろう

津島神社内にある石燈篭には、寛政3年(1791)に琉球使節が美濃路墨俣宿を通行した際、天王講中、墨俣惣中の人々が刻銘文を依頼したとされる”琉球国儀衛正毛廷柱”の銘が刻まれており、近世の一大イベントであった琉球使節が墨俣宿を通行し、この地の人々と交流した歴史の証といえます。

☆大垣市景観自慢

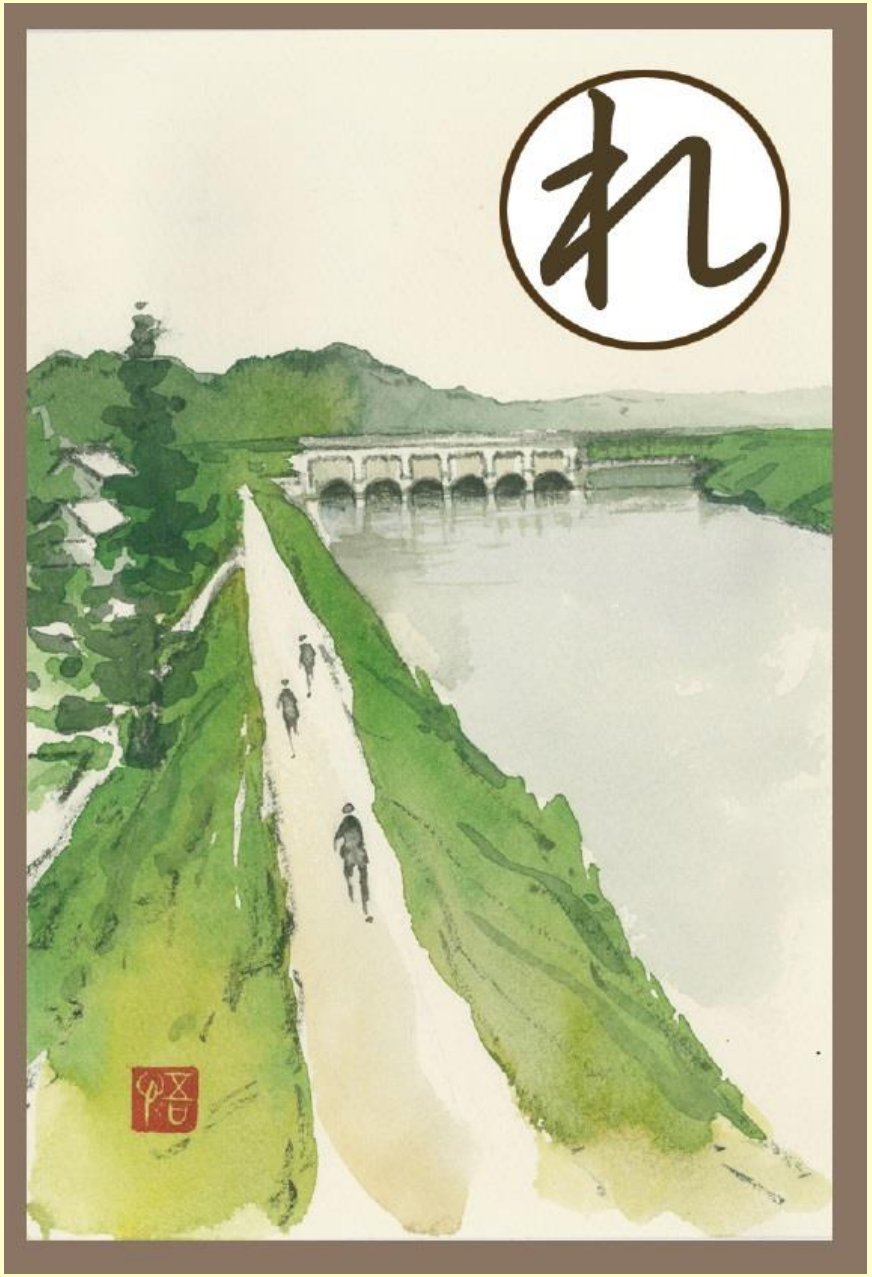
流浪の西行法師

墨俣で和歌を詠む

西行は平安時代末期から鎌倉時代初期にかけての武士・僧侶・歌人で、鎌倉街道を通行中に、次の歌を詠んだといわれています。

春くれば　うぐいすのまた（墨俣）
梅にきて　実のなりはじめ（美濃）
花のおわり（尾張）

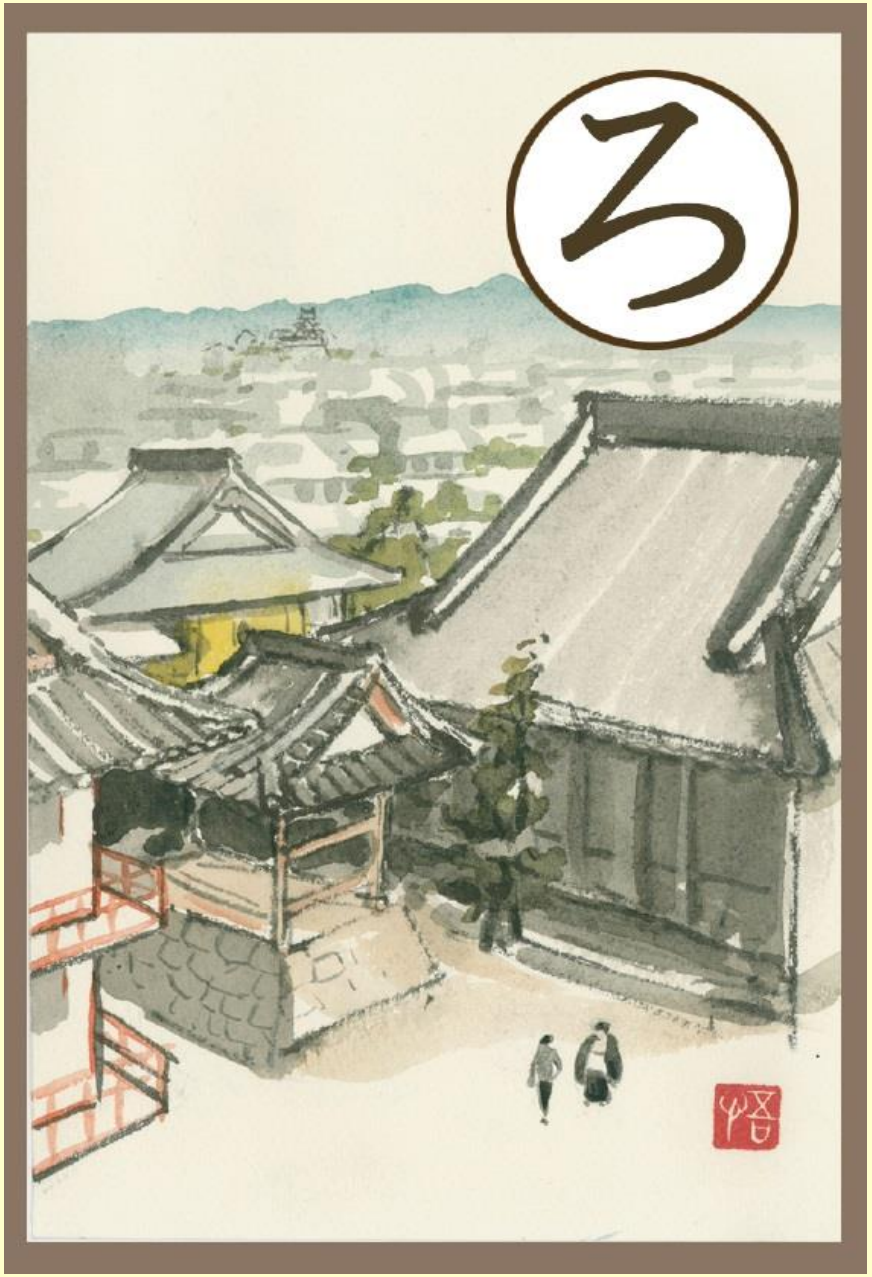
（春がくれば、うぐいすが梅にとまり、梅の実がなりはじめる頃には、花も終わりである。）



歴史に残る　水との闘い

犀川事件

一夜城址周辺には、犀川、五六川等の河川が集まり長良川に合流していますが、長良川の河床が高いために、少しの降雨でも本巣郡南部に水がたまり大きな被害をもたらしていました。昭和４年（1929）に犀川堤を切り割り、墨俣輪中の中に水路を新設し、長良川に排水する計画が住民の承諾もなく国会を通過しました。揖斐川以東7か町村の住民はそれに反対し、警官隊と衝突になり、軍隊も出動しました。この事件により当初計画は変更され、昭和11年（1936）に墨俣地域の東側に新水路（通称「新犀川」）が完成しました。



六か寺に　歴史の歩み

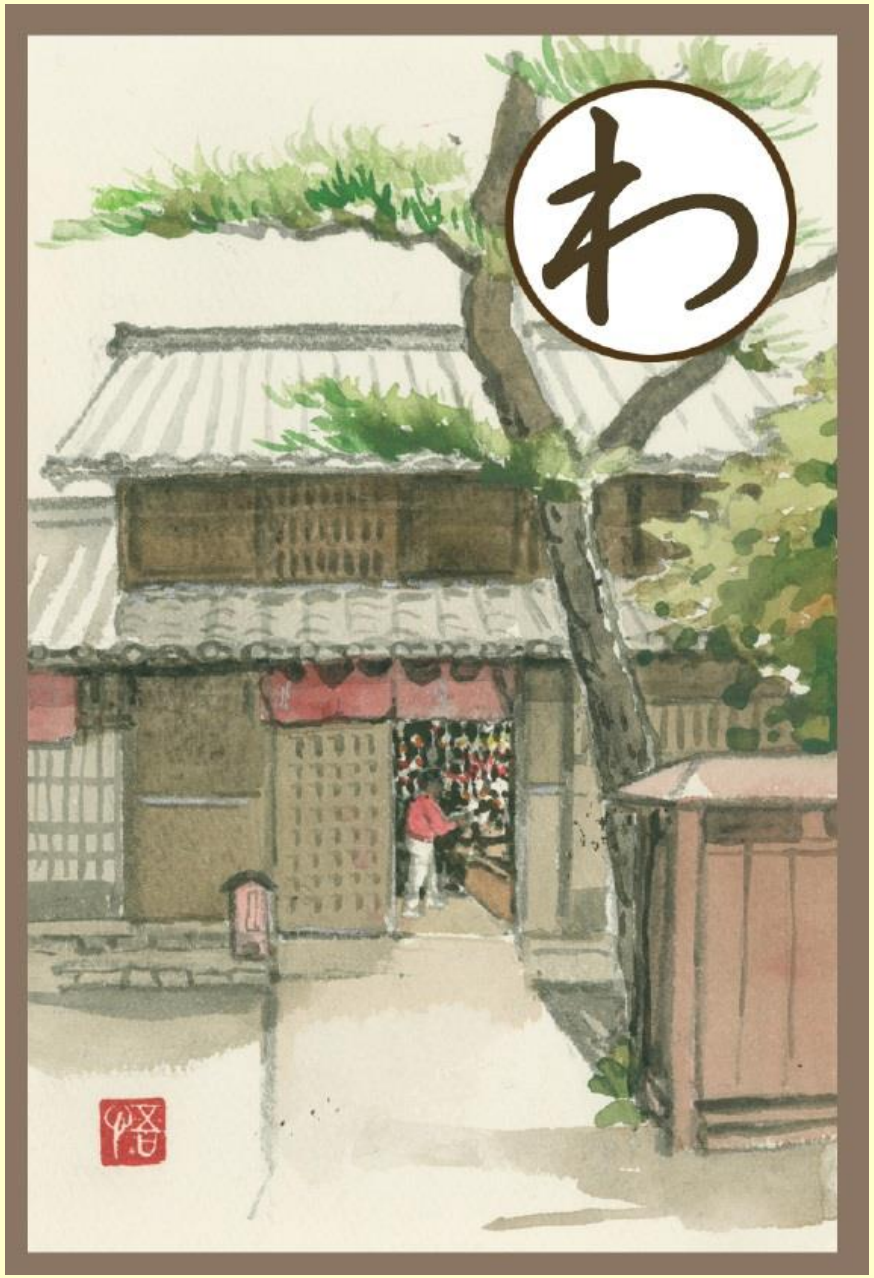
ろっじ　れきし　あゆ

寺町界隈

てらまちかいわい

墨俣の寺町は、地名がその名を示す通り、付近に寺院が集まり、昔の面影を残しています。等覚寺を除く各寺院は、江戸時代に他所より移転してきており、また美濃路の墨俣宿と関係が深く、歴史の歩みを感じさせてくれます。本正寺には、明治時代に脇本陣の門が移築されており、山門として残されています。

☆大垣市景観遺産



わきほんじん　すのまたじゅく　　なごり
脇本陣　墨俣宿の　名残なり

　美濃路墨俣宿にあった脇本陣跡に立つ民家です。かつての脇本陣は明治24年（1891）の濃尾震災の際に倒壊し、現在は本正寺に移設された山門が残るのみです。その後、再建されたこの建物は、脇本陣時代の構造を色濃く残しており、当時の宿場町の面影を偲ぶことができます。週末には、お土産処を開店しています。

☆大垣市景観遺産